

令和4年度指定 文部科学省事業
「新時代に対応した高等学校改革推進事業」(創造的教育方法実践プログラム)
第3年次 研究開発実施状況報告書



挑め、ともに!

ごあいさつ

令和４年度に文部科学省より「新時代に対応した高等学校改革推進事業」（創造的教育方法実践プログラム）の指定をいただき、「白い森未来探究プログラム」として、① AI 教材の導入による教科学習の個別最適化、② 教科横断的な学びの推進と小規模校連携による探究学習の個別最適化、③ オンラインコミュニティの構築と進学希望者の学びの動機喚起を中心に取り組んでまいりました。多くの皆様よりご助言やご指導、ご協力をいただき、令和６年度も事業に取り組むことが出来ました。この場をお借りして、感謝申し上げます。

３年間の取組を振り返りますと、１年次である令和４年度は、AI 教材を導入することで９割以上の生徒が学習効果や学習意欲の向上があると感じていること、多角的な視野で物事に触れる教科横断的な学びにより教科学習と世の中のつながりを実感できていること、オンラインコミュニティによる学校横断型探究学習により個々の探究学習が充実し深められることという成果が得られました。

２年次である令和５年度は、学校間オンライン探究学習の充実、各教科が協力しながら教科横断的な学びの在り方の研究、AI 教材活用の工夫による進学希望者の学習意欲向上に重点を置き、取り組みました。その結果、生徒が自ら苦手な科目や分野に取り組むことができるようになったり、生徒の興味関心を引き出すことができたりした事例が増えてきました。

そして、３年次（最終年）である令和６年度は、令和７年度以降を見据えて、それぞれの取組を改善・充実を図りました。特に教科横断型授業には、全教員が２回以上チャレンジし、それぞれの教科の学習計画の中に位置づけることができ始めています。本校では、この３年間の取組をもとに、次年度以降の教育課程に実装していく所存です。ぜひ報告書をご高覧いただき、ご感想やご意見を頂戴できれば、教職員、生徒、地域の励みになります。

現在、少子化による高等学校の小規模化が全国各地で進行しており、本校もその例に漏れず少人数の生徒と教職員で日々試行錯誤しながら教育活動を展開しております。その取組が、少しでも今後の学校づくりの参考になるのであれば幸いです。

結びとなりますが、本事業の運営指導委員として御指導いただきました岡崎エミ様、稲垣忠様、阿部剛志様、牛木力様をはじめとして、ご協力ご支援を賜りましたすべての関係者の皆様に心から感謝し、また、今後もしばしばご指導賜りますようお願い申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。

校長 山科 勝

【山形県立小国高等学校】白い森未来探究プロジェクト

背景 少子化の影響による小規模校の増加
課題 小規模校の生徒数・教員数の減少

- ・人的リソースが不足
- ・生徒の人間関係が固定化
- ・多様性が不足
- ・生徒同士の切磋琢磨が不足
- ・多様な専門性を持つ教員が不足

ICT端末を用いた 遠隔・オンライン教育の活用



興味・関心が似ている生徒同士が刺激し合いながらオンラインで探究学習を深める

期待される成果:

主体性、挑戦心、協働力 向上
 「教科学習」「探究学習」「進路希望実現」

個別最適化

テーマに合った
専門家の伴走

県外小規模校との
学校横断型探究学習の推進

【岩手県大槌高校】
 【熊本県小国高校】
 【山形県小国高校】

2年間の
連携実績
あり

● 相互交流 ● 地域人材による講演
 ● テーマ別ゼミ ● 合同発表会

往還

各教科の学習

AIDリル
 (Qubena)
 による個別最適
 な学び

基本的知識・技能の定着と意欲喚起

目次

第1部．事業の概要		1
第2部．事業の詳細		
1．AI教材の導入による教科学習の個別最適化		1 3
2．教科横断的な学びの推進		1 5
3．オンラインコミュニティの構築と進学希望者の学びの動機喚起		2 2
4．研修		2 8
第3部．評価		3 2
第4部．今後の取組について		3 4
第5部．資料		
1．運営指導委員会		3 5
2．成果報告会		3 7
3．全国高等学校小規模校サミット		3 8
3．報道		3 9

第1部 事業の概要

1 研究開発名

令和6年度「新時代に対応した高等学校改革推進事業」

2 指定類型

創造的教育方法実践プログラム

3 期間

令和6年4月1日～令和7年3月31日

4 構想名及び構想の概要

構想名: 白い森未来探究プログラム
カリキュラム開発のテーマ: ②自分のペースでの学習に着目した学び
構想の概要: ICT端末を用いた遠隔・オンライン教育を活用し、AI教材による個別最適化された学び直しと人的リソースや多様性を生み出しながら行う先進的な県外小規模校横断型探究学習の推進により、課題解決のための思考力・判断力・表現力等の資質・能力の育成を図る。本構想により、小規模校が共通に抱える課題を解決し、教科等横断的な学びの実現により教育効果の最大化を図る。

5 事業の目的等

(1) 本事業に申請する高等学校を取り巻く状況の分析、本事業に取り組む必要性

①本校を取り巻く状況の分析

小国町	・県南西部、新潟県境に位置し、森林面積が95%以上を占める全国屈指の豪雪地帯 ・人口約7,000人の過疎地であり、生徒の地元への定着や地域産業を担う人材輩出への期待が高く、高校廃校への危機感から、高校・地域協働体制が生まれている ・県内隣町から峠越えで40分。JR米坂線が令和4年豪雨で不通のため陸の孤島
町の産業	・ブナ原生林の恵みを糧にするマタギ文化が残る町。特産物はワラビ ・豊かな水資源を基盤とした半導体製造と重化学工業に支えられた企業城下町 ・生徒の地元への定着や地域産業を担う人材輩出への期待が高い ・期待する人材像 「起業型人材」地域資源やICTを活用した新しい仕事を生み出せる人 「複業型人材」農、工、土木、観光業などを組み合わせて独自の働き方ができる人 「自己開発型人材」自らの市場価値を自己の責任において向上できる人
町の教育	・保小中高一貫教育(2018年度～)「郷土理解・情報活用・国際理解」に注力 ・本校生の約90%が町内中学校出身者 ・保護者は、郷土に愛着を持ち、個々の多様な進路希望の実現に対応できる資質・能力の育成や人間的成長を本校に期待

小規模校としての課題	進路多様校の課題	本校ならではの課題
【生徒の課題】 ・同じ小中学校で育った生徒が9割 ・多様性が乏しく、人間関係が固定化 ・生徒同士の切磋琢磨の機会が少なく、挑戦意欲が乏しい 【教員の課題】 ・1学級化により教員数減 ・専門性を持った教員が指導できないケースもある	進学と就職が約半数ずつ (2022年度)の進路多様校 ↓ 多様な学力に合わせた授業設計が難しい →大学受験に必要な科目の設置とモチベーションの維持困難	・進学希望者が少ないため学びのモチベーションを保ちながら自学自習することが難しい

②本事業に取り組む必要性

近年の「全国高等学校小規模校サミット」「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」等を通し、生徒の小規模校への誇りや郷土愛の向上、自分の興味・関心への気づきの高まり、主体性、協働性等が伸びるという成果が見られる。一方で、上記のような課題があり、解決に向け、本事業に取り組む必要性が極めて高い。

(2) 本事業を実施する目的・目標(本事業を通じて育成を目指す資質・能力を含む)

【目的・目標】

ICTやAIなど新しい教育方法を活用し、「教科学習」「探究学習」「進路希望の実現」の個別最適化を実践し、小規模校特有の課題を克服するとともに、本校が育成を目指す資質・能力「主体性」「挑戦心」「協働力」(下表)を生徒が身につけることを目的(アウトカム)とする。また、大目的を達成するために、①～④のアウトプットを設定する。

主体性			挑戦心			協働力		
郷土の誇りと愛着を持ち、学び続けながらより良い地域づくりに主体的に関わる			健康で豊かな人間性を持ち、新たな価値創造に挑む			多様性や個性を認め、他者を尊重しながら協働できる		
自己理解	自己肯定感	学ぶ意欲	情報収集活用 力	課題設定 力	共感力	受容力	対話力	共創力
計画力	意思ある 選択	創造的市 民性	思考力	想像力	行動力	持続可能 性意識	グローカ ル意識	
			やり抜く 力	伝える力	振り返る 力			

①教科学習における理解力と習熟度に応じた個別最適な学びと単元配列表を活用した教科等横断型授業の実現

○教科等の学習を深め、探究学習との往還を図り、生徒の学習行動の変容をねらう。

【育成を目指す資質・能力】

「計画力」「学ぶ意欲」「やり抜く力」「振り返る力」「思考力」

【具体的な方策】

- ・AI学習システム(Qubena キュベナ)の導入により、学びなおしと個別学習の実現
- ・いつ何をどこまで学ぶかを自分で計画する「マイプラン学習タイム」の導入
- ・自学自習習慣を身につけるためのモチベーション・マネジメントの導入

②小規模校連携構築による人的資源と多様性の確保、探究学習の個別最適化

○興味・関心を大切に探究学習の個別最適化を図り、探究を教科横断的に深める。

【育成を目指す資質・能力】

「自己理解」「創造的市民性」「情報収集活用力」「課題設定力」「伝える力」「対話力」

【具体的な方策】

- ・全国の小規模校との探究学習連携の継続(2020年度～の実績)
- ・全国高等学校小規模校サミットで培った全国の小規模校との関係性を軸に、生徒各自のテーマにあった、ア:探究仲間づくり、イ:専門家等からの助言や伴走、ウ:発表とフィードバックの場を構築
- ・全国高等学校小規模校サミットや研修旅行などによる対面での信頼関係の構築

③オンラインコミュニティ構築による進学希望者の学びの動機喚起と進路実現

○オンラインで小規模校の生徒がつながり、進学希望の生徒の学習意欲を高める。

【育成を目指す資質・能力】

「学ぶ意欲」「計画力」「意思ある選択」「やり抜く力」「対話力」

【具体的な方策】

- ・全国の小規模校の進学希望者や大学生による「進学希望者コミュニティ」の構築

④事業成果の発信による全国の小規模校が抱える共通課題の克服

○全国の小規模高校のモデルとして、本事業の成果を発信・共有を図る。

【具体的な方策】

- ・全国小規模校サミットを基軸にした小規模校ネットワークでの情報発信

6 実施体制

(1) 管理機関における事業全体の管理体制

- ・運営指導委員会には、下記の4名の専門家を迎える。

所属	氏名	主な実績
(一財)地域・教育魅力化プラットフォーム	岡崎 エミ	・コミュニティデザイナーとして全国の住民参加のまちづくりを支援 ・「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」企画評価会議委員

		・「COREハイスクールネットワーク構想」運営指導委員 ・「マスターハイスクール事業」高校伴走担当 ・新庄最上ジモト大学運営委員アドバイザー ・元 東北芸術工科大学 コミュニティーデザイン学科准教授
(一財)つわの学びみらい	牛木 力	・島根県立津和野高等学校で探究学習専門の高校魅力化コーディネーターとしてカリキュラム開発と高校魅力化に参画 ・元 東北芸術工科大学 コミュニティーデザイン学科講師 ・「TOMODACHIソフトバンク・リーダーシップ・プログラム」プログラムづくり参画
三菱UFJリサーチ&コンサルティング	阿部 剛志	・文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業企画評価会議地域魅力化型企画評価部会」協力者 ・「高校魅力化評価システム」を一般社団法人地域・教育魅力化プラットフォームと協働で開発
東北学院大学	稲垣 忠	・文部科学省 初等中等教育段階の SINET 活用実証研究事業委員 ・「児童生徒の情報活用能力の把握に関する調査研究」企画推進委員 ・ICT活用教育アドバイザー委員 ・「教育の情報化に関する手引」作成検討会委員等を歴任

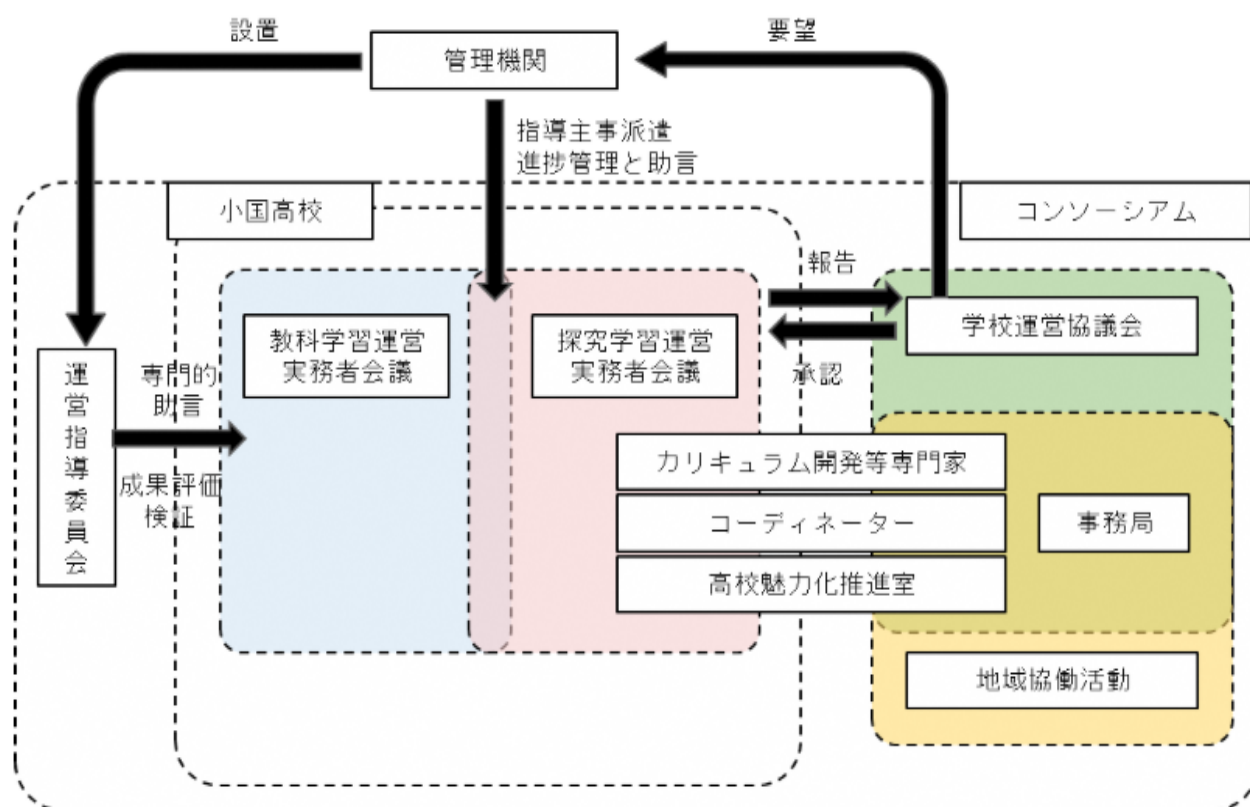
- ・運営指導委員会は年3回開催。(5月・11月・2月に実施)
- ・運営指導委員会は、本事業の運営に関し、事業構想や目的・目標達成の進捗状況等について検証・評価を行うとともに、それぞれの専門的見地から管理機関と本校に対し情報提供と指導・助言及び支援を行う。AIオンライン教材を活用した教科学習の個別最適な学びと学校横断型探究学習に関して指導・助言を行うのは稲垣忠氏が担当。教科等横断的カリキュラムの開発には岡崎エミ氏と牛木力氏。阿部剛志氏には、本校のカリキュラム開発のデータを用いた分析検証結果を基に、評価・研修等に参画していただいた。また、阿部氏のご指導によりロジックモデルを改善した。

(2) 管理機関における事業全体の成果検証、評価のための体制

- ・管理機関は、本事業を実施していくうえで指導・助言を行う専門的見識を持ち、本校の教育実践に精通している合計4名の専門家から構成される運営指導委員会を設置した。そのうえで、管理機関は、定期的に運営指導委員会を開催した。運営指導委員会は、実施主体である本校の取

組の実施・進捗状況を把握するとともに、取組の適切な実施と継続的な改善に資するよう個々の取組や本事業全体及び、事業の成果検証・評価に対し必要な指導・助言した。

【実施体制図】



コンソーシアムの構成員

所属	氏名	主な実績
小国町役場	佐藤 友春	学校運営協議会委員
山形県立小国高等学校PTA	井上 賢和	学校運営協議会委員
山形県立小国高等学校後援会	伊藤 明芳	学校運営協議会委員
山形県立小国高等学校同窓会	渡部 素子	学校運営協議会委員
小国町立小国中学校校長	横澤 聡一	学校運営協議会委員
東北芸術工科大学	森 一貴	学校運営協議会委員
株式会社いきいき街づくり公社	舟山 康名	学校運営協議会委員
旬彩工房	山口 ひとみ	学校運営協議会委員
民宿の越後屋	本間 義人	学校運営協議会委員
桜川酒造株式会社	村上 友梨	学校運営協議会委員
日本重化学工業株式会社小国事業所	高橋 史記	学校運営協議会委員
ペレットマン	高橋 安以子	学校運営協議会委員
オプトタカハシ代表	高橋 泰弘	学校運営協議会委員

7 本校における事業の運営

(1) 運営実務者会議の体制

本事業を校内で推進する主体を運営実務者会議とし、管理職の下、教科等横断的な取組を行うための事業進捗確認と検証、情報共有、調整、検討の場とした。事務的側面については、事務長へも報告し、必要な協議を行った。運営実務者会議で検討・決定した事項については、随時全職員と共有するとともに、定例職員会議（全職員で構成、月1回開催）で周知した。

「白い森未来探究学」（総合的な探究の時間）の担当者は、カリキュラム開発等専門家との十分な連携の下、教科等横断的な取組を行うために教科主任の役割分担や進捗状況等を統括した。

教科主任は各教科を担当するとともに、小規模校による教員数の制限を克服する観点から、自身の担当教科以外も支援し、教務主任とも情報共有しながら校内の教員の総力で教育課程を実施した。なお、教育課程を実施する上での課題や要望等については、コーディネーターを通じて町担当部局や産業界、連携先等の各関係各所に共有され、所要の支援が本校に提供された。

(2) カリキュラム開発等専門家及びコーディネーターの校内における役割

カリキュラム開発等専門家及びコーディネーターには下記の2名を配置した。カリキュラム開発等専門家は、教務主任・白い森未来探究学主担当と連携しながら、白い森未来探究学（総合的な探究の時間）やそれ以外の教科が実践的で教科等横断的な取組となるよう、企画立案・運営を行った。

コーディネーターは、カリキュラム開発等専門家や教務主任・進路指導主事の求めに応じ、ワンストップで地域内外の関係各所・各担当者との連絡・調整を行う役割を果たした。なお、コーディネーターとして小国町高校魅力化コーディネーターでもある片岡隆史氏も本事業に協力していただき円滑な運営にご尽力いただいた。

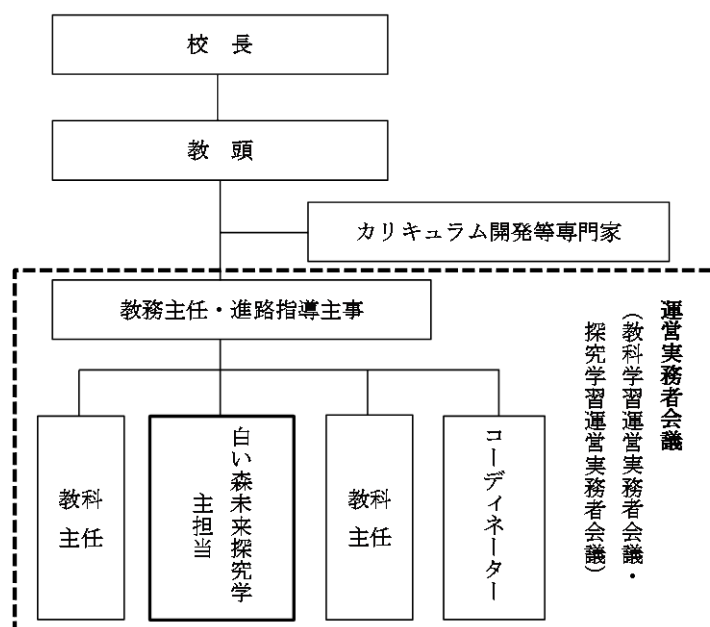
【カリキュラム開発等専門家】

岡崎エミ氏（（一財）地域・教育魅力化プラットフォーム研究開発員）

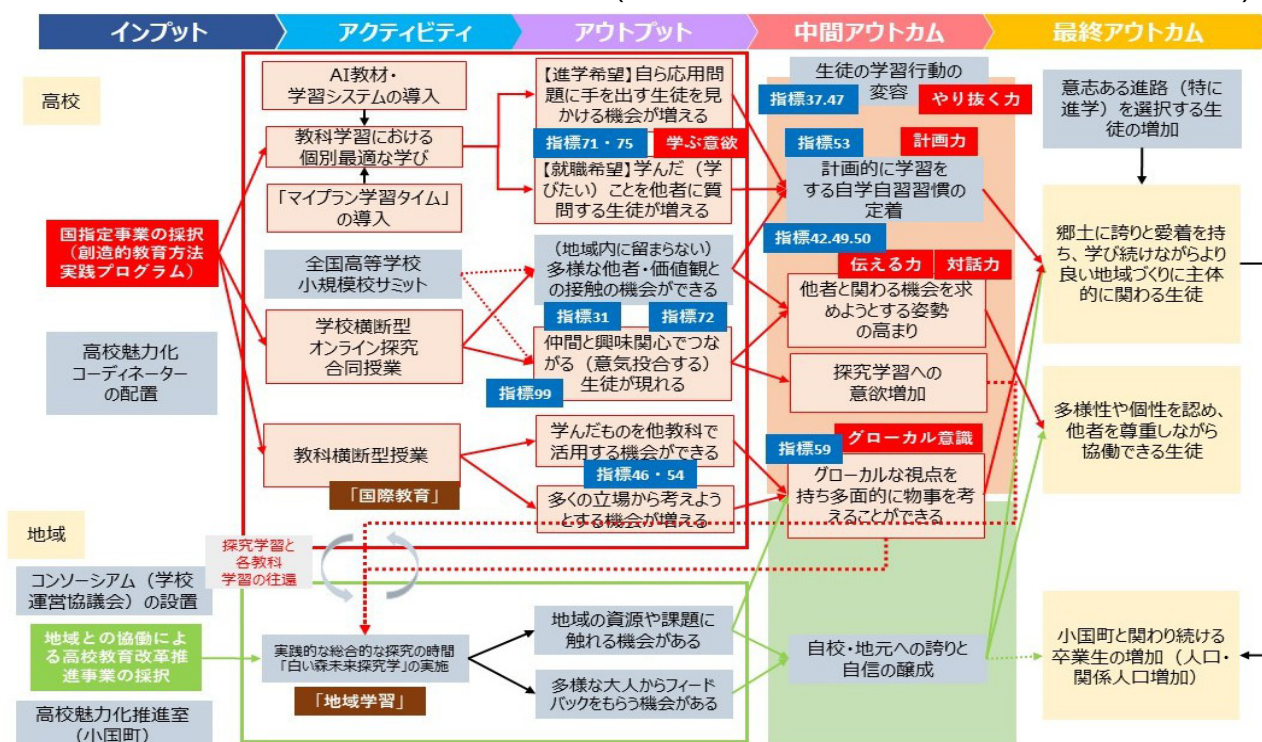
【コーディネーター】

本事業コーディネーター：渡部美聡氏

< 校内における事業の管理体制 >



山形県立小国高等学校 ロジックモデル（「白い森未来探究プロジェクト」指標入り）



国指定事業に係る指標一覧（高校魅力化評価システムのアンケート）

ロジックモデルに記載している指標	アンケートの質問内容
31:探究性に関わる学習環境	お互いに問いかけあう機会がある
37:主体性に関わる自己認識【やり抜く力】	うまくいか分からないことにも意欲的に取り組む
42:協働性に関わる自己認識【対話力】	相手の意見を丁寧に聞くことができる
46:探究性に関わる自己認識	勉強したものを実際に応用してみる
47:社会性に関わる学習環境【やり抜く力】	忍耐強く物事に取り組むことができる
49:協働性に関わる自己認識【伝える力】	自分の考えをはっきり相手に伝えることができる
50:協働性に関わる自己認識【伝える力】	友達の前で自分の意見を発表することは得意だ
53:主体性に関わる自己認識【計画力】	自分で計画を立てて活動することができる
54:探究性に関わる自己認識【思考力】	一つ二つの立場だけでなく、できるだけ多くの立場から考えようとする
59:社会性に関わる自己認識【グローカル意識】	地域で起きている課題と世界で起きている課題は、お互いに関連しあっていると感じる
71:主体性に関わる行動【行動力】	授業で分からないことについて、自分から質問したり、分かる人に聞きにいったりした
72:協働性に関わる行動	自分の考えについて、様々な人に意見やアドバイスを求めた
75:探究性に関わる行動【行動力】	授業の内容について、「なぜそうなのか」と疑問を持って、自分で考えたり調べたりした
99:独自設定質問	多様な同年代と関わることで、視野が広がり考えが深まった

※【 】内は、本校で定めた育成したい資質・能力の柱「主体性」「挑戦心」「協働性」（3つのおぐバワ）に紐づいた育てたい資質・能力についての位置づけ

8 本校における取組

(1) カリキュラム開発に係る概要

○教科学習における理解力と習熟度に応じた個別最適な学びと単元配列表を活用した教科等横断型授業の実現

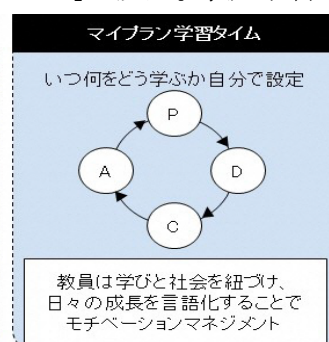
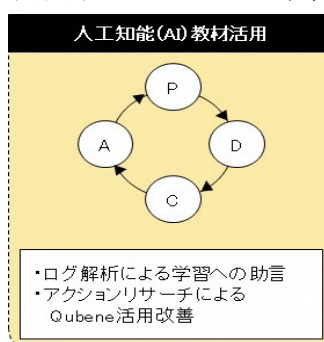
・1年生に対し、義務教育段階の5教科学習内容の学び直しや高等学校段階の学習内容への円滑な移行を目的に、人工知能(AI)教材「Qubena(キュービナ)」を導入し、生徒一人ひとりに理解力と習熟度に応じた個別最適化された学習を提供した。

・2、3年生には学習習熟度の差が大きい高校数学の Qureous(R6 は後継教材 tokuMo)を導入した。

・教員は、操作ログや計算過程、回答データを分析し、生徒のつまづきを把握し、助言。アクション・リサーチにより、活用方法の継続改善・充実を図った。

・各授業内や単元内において自分の学習を計画する「マイプラン学習タイム」を設定。家庭学習でもモチベーション・マネジメントを行いながら学習のマイプラン作成を促し、自律的な学習者の育成を図った。

・各教科で作成する年間指導計画に基づく単元配列表を活用し、各教科担当教員の協働による教科等横断型授業を推進し、目指す資質・能力の効果的な育成を図った。



○小規模校学校連携型探究学習による教科等横断的な学びの個別最適化

遠隔地の小規模校(申請校、岩手県大槌高等学校及び熊本県小国高等学校)がそれぞれの人的リソースを共有し、探究学習の個別最適化を目指す新しい教育方法を実現した。

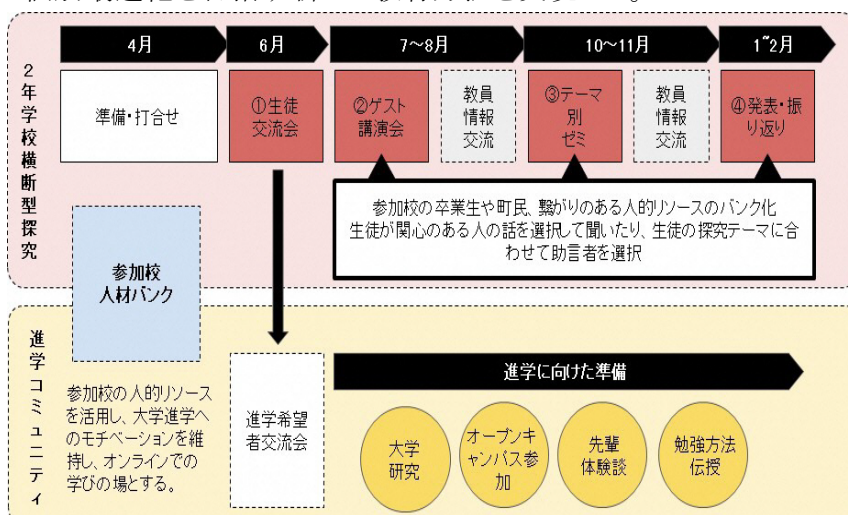
・同じようなテーマに興味・関心を持つ生徒同士が Zoom を用いたオンライン上で交流やテーマに関する情報交換を行い各教科の学習を意識しながら探究学習を深めた。

・テーマの専門家を提供し、探究学習の推進と深化を促し、教科等横断的な学びの個別最適化を図った。

○オンラインコミュニティ

構築による進学希望者のモチベーション喚起と進路実現

小規模校の進学希望者による「進学希望者コミュニティ」を構築し、情報交換をとおして学びへの動機を喚起した。



(2) 関係機関等との連携・協力体制の構築の考え方・方法

○小国町や小国町教育委員会との連携

2019 年度指定文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業(地域魅力化型)」では、小国町長が管理機関の代表となり、本校と共に事業を推進してきた。2021 年度からは、町教育委員会内に高校魅力化推進室が組織され、課長補佐級以下5名の職員体制で県外地域留学生関連業務や探究活動を含む教育活動全般について常に連携しており、連携・協力体制は万全である。

○県外小規模校横断型探究学習のための関係機関との連携

岩手県立大槌高等学校及び熊本県立小国高等学校とは、2020 年度から3年間にわたってオンライン交流や探究学習の取組を行ってきた。また、本校は 2018 年度から「全国高等学校小規模校サミット」主催事務局校として他の県内外の小規模校との交流や協働の実績があるので、連携の発展性もある。

○連携協力を担うコーディネーター

本事業のコーディネーターが取り組む内容は、探究活動に関する関係機関との事前調整やオンライン活動の準備、情報発信等の業務を担う。2022 年度からは町のコーディネーターとは別に、本事業のコーディネーターを新たに配置している。

9 実施内容

(1) 取組内容

- ・令和6年度は下記に力点を置いた計画に沿って「カリキュラム開発」と「関係機関等との連携・協力体制の更なる構築強化」に取り組み、指定終了後も継続して取り組めるように進めた。

①AI 教材の導入による教科学習の個別最適化

- ・義務教育段階や高等学校の学習内容の定着、学習意欲の喚起、基礎学力の伸長による探究学習への波及、授業と家庭学習の連動による自律的学習者育成を推進する。

②教科横断的な学びの推進

- ・運営指導委員の助言等をもとに、教員間で連携した教科等横断的な学びを推進する。
オンライン・オフラインを駆使した教科等横断的な探究学習を、外部人材を活用しながら学習に必要な研修とともに個別最適化を進める。その際、常に各教科学習との往還へ気づきを促す。

③オンラインコミュニティの構築と進学希望者の学びの動機喚起

④成果と課題の検証と他校・他地域への発信

- ・運営指導委員による授業参観や学習ログ等の分析、また、各種検証に基づく進捗状況の定期的な確認と成果検証を行い、成果を発信する。

(2) 令和6年度(3年次)の計画

月	事業の内容	
	カリキュラムの開発	関係機関等との連携協力体制の構築
4月	白い森人研修(グランドデザイン研修) 運営実務者会議	高校魅力化実務者会議(町・学校) 保小中高一貫教育推進部会
5月	白い森人研修(伴走研修) 1年地域フィールドワーク 2・3年探究を語る会	高校魅力化実務者会議(町・学校) 保小中高一貫教育推進協議会 学校運営協議会・コンソーシアム会議

6月	1年地域フィールドワーク 2年学校横断型探究学習 全国高等学校小規模校プレセッション	高校魅力化実務者会議(町・学校) 学校横断型探究学習打合せ 町合同学校運営協議会
7月	サミット参加校事前オンライン研修 1学期振り返りワークショップ 全国高等学校小規模校サミット	高校魅力化実務者会議(町・学校) サミット参加校事前オンライン打合せ
8月	白い森人研修(振り返り)	高校魅力化実務者会議(町・学校)
9月	1年地域フィールドワーク	高校魅力化実務者会議(町・学校)
10月	中間総括会議 2年探究トークフォークダンス 1年町課題解決ミニプロジェクト 2年学校横断型探究学習(中間発表) 1年ハタラトーク!! 若手社員と語る会	高校魅力化実務者会議(町・学校) 学校横断型探究学習打合せ 保小中高一貫教育事務局会 保小中高一貫教育推進協議会 学校運営協議会・コンソーシアム会議 町合同学校運営協議会
11月	2年研修旅行 運営実務者会議 第2回運営指導委員会(指導・助言)	高校魅力化実務者会議(町・学校) 学校運営協議会・コンソーシアム会議
12月	白い森人研修 町教育フォーラム(学習発表) 2年学校横断型探究学習 1年探究学習成果発表会 学校祭(学習発表) 2学期振り返りワークショップ	高校魅力化実務者会議(町・学校) 学校横断型探究学習打合せ
1月	年間総括会議 3年探究学習成果発表会	高校魅力化実務者会議(町・学校) 保小中高一貫教育推進部会
2月	マイプロジェクト山形県サミット 2年探究学習成果発表会 2年学校横断型探究学習(まとめ) 運営実務者会議 第3回運営指導委員会(成果検証)	高校魅力化実務者会議(町・学校) 保小中高一貫教育事務局会 保小中高一貫教育推進協議会 学校横断型探究学習打合せ 学校運営協議会・コンソーシアム会議
3月	事業成果報告	高校魅力化実務者会議(町・学校)

※白い森:小国町を象徴するブナの木肌と雪の「白」から町全体を「白い森」と表現

10 成果の普及のための取組

下記の方法により他校・他地域への成果の普及を行う。また、他校等から取組について照会があれば、情報提供を丁寧に行う。

(1) 実践報告会及び公開授業の実施(令和6年 11 月)

・令和4年度から3年間取り組んできた本事業の成果を普及するために、実践報告会と公開授業を実施した。

- ・公開授業は、ビジネス基礎と国語表現の教科横断型授業として行った。その概要は次のとおりである。

○ 単元名「増加している訪日外国人観光客に私たちはどう向き合っていくべきか？」

国語表現:外国人観光客の増加に関する記事をネットや新聞を用いて収集し、それを根拠に「外国人観光客の増加のメリット／デメリット」や「二重価格を設定すべきか」について自分の考えをまとめる。	2科目の学びを踏まえてディスカッションを行う。
・ビジネス基礎:観光をマーケティングの視点で考え、二重価格設定について詳しい知識を得る。また、外国人観光客に関する具体的な数値を調査し、現状を理解する。	

- ・実践報告会では、取組内容の説明と事業のロジックモデルにおけるアウトカムの状況報告を行った。

(2) 小国町教育フォーラムでの生徒による成果発表(令和6年12月)

小国町立小国小学校アリーナにて、「白い森おぐに教育フォーラム 2024」が開催され、小国高校生12名が発表、2名が司会を行った。発表は「白い森未来探究学(1年生・3年生)」、「アメリカ短期留学(2年生)」、「台湾研修旅行(2年生)」、「地域みらい留学生(県外生)」、「全国高等学校小規模校サミット」の5つについて、地域住民及び学校運営協議会委員に対し報告を行った。

(3) SNSやメディアでの情報発信

本事業の取組を実践するごとに公式SNSで、生徒の様子を中心に発信した。また、月に1度程度公式ホームページに1か月のトピックを掲載し、実施校の魅力ある取組として普及に努めた。また、特色ある授業や行事があるたびに、新聞社及びテレビ局へプレスリリースしたり、教育専門誌等に寄稿したりすることで、成果の普及を図った。

(4) 成果報告書による普及

年度末に事業の取組をまとめた成果報告書を作成し、同事業の指定を受けている学校等や事業連携先高等学校、全国高等学校小規模校サミット参加校等に提供した。また、他校等からの実施校へ訪問受け入れの機会があれば、取組と成果を発信し、普及に努めた。

※令和6年度は、三菱みらい育成財団、宮城県、新潟県、茨城県、宮崎県、山形県議会等から実施校に学校訪問・視察があった。

11 国の指定終了後の取組継続のための仕組みづくり

(1) 教育課程への実装

- ・AI教材については、令和7年度に小国町予算でリクルート社のスタディサプリを全校生の一人1台端末へ導入することとなっているため、活用方法について継続して研究を進めていく。
- ・教科横断型授業については、令和7年度以降も各教科のシラバスに年間を見通した計画として位置づけ、全教職員の協働体制のもと継続実施していく。また、白い森人研修を通して教員の授業力向上の一環として授業のブラッシュアップを図っていく。
- ・学校横断オンライン探究学習については、令和7年度も認定NPO法人カタリバと連携して実施していく予定である。また、実施校は、全国高等学校小規模校サミットを今後も毎年開催することとして

おり、全国の多くの小規模校との交流は継続するので、取組について全国各地の小規模校を対象に連携について協議することが可能と考える。

(2) 県からの指導助言

- ・取組の継続に当たり、実施校が専門的な指導・助言を必要とする際は、県教育委員会の担当指導主事が対応し、取組を支援する体制が整っている。

(3) 予算面・人員配置面での取組継続

・町との協働

指定終了後も実施校は、町や町教育委員会と協働しながら取組を発展継続させることとなる。平成13年度から6年間、連携型中高一貫教育の文部科学省研究開発学校の指定を受け、それが終了した後、町と共に小中高一貫教育(平成30年度からは保育園を加えた保小中高一貫教育へ発展)へと発展継続させた実績がある。現在、保小中高一貫教育推進協議会より予算面でも支援を受けているため、事業継続が可能である。実施校は、令和6年6月に小国町及び東北芸術工科大学との3者による連携協定を締結しており、小国町で雇用しているコーディネーターの協力を得て取組を続けることとしている。

・「小国高校を支援する会」との協働

必要となる費用については、現在も実施校に対し力強い支援を行っている「小国高校を支援する会」等と実施校が相談しながら検討する。

・一般財団法人三菱みらい育成財団助成

令和6年度から3年間、一般財団法人三菱みらい育成財団から助成を受けている。

第2部 事業の詳細

- 1.AI教材の導入による教科学習の個別最適化
- 2.教科横断的な学びの推進
- 3.オンラインコミュニティの構築と進学希望者への学びの動機喚起
- 4.研修

1. AI教材の導入による教科学習の個別最適化

【令和6年度（3年次）の概要】

AI教材として1年生にQubena（中学校以前の5教科）、2年生及び3年生の進学系授業の選択者にtokuMo（高等学校学習範囲の英語・数学・国語・理科・歴史・公民・情報の7教科）を一人一台端末のChromebookにインストールし使用した。Qubenaは中学校以前の5教科の内容のため、中学校までの学習内容の学び直しによる高校学習内容への円滑な移行が可能であり、tokuMoは高校における学習内容なので、高校の学習内容の習熟が期待できる。学習意欲の一層の喚起に加え、特に3年生の進学希望者に対しては、大学受験並びに大学進学後でも通用する基礎的な学力の定着を期待して導入した。

今年度は、「初めからあきらめることなく、人に聞いたりできることに取り組んだりできる」「自分の興味・関心に応じて、見通しを立てて主体的に学習を進めることができる」をねらいとし、教員が問題を選びワークブックとして課題配信するという授業内や長期課題としての使用に加え、生徒が教科と分野を指定して自由に進めることができる機能に着目し、自学自習や自分で学習内容を計画して自律的に学習を進めるマイプラン学習に重点を置いた。授業外での使用頻度を高めるために朝学習やホームルームの時間等の学年で使える時間での利用を、その学年の実態に応じて促した。

実践例1）数学Ⅰ授業（マイプラン学習(単元内自由進度学習)）のやり方をブラッシュアップ

「学習の手引き」の学習内容を小単元ごとに記載するようにして、生徒がどこをやればいいのか分かりやすくした。また、学習方法の選択肢として、①教員の説明を聞きながら学習する、②級友と教え合いながら学習を進める、③一人で自分のペースで学習を進めるの3つを提示し、生徒が自分に合った学習スタイルで理解を深めることとした。学習教室も3箇所準備し、学習方法別に場所を分けた。

〔生徒の声〕

①を選択した生徒：「（教員の説明だけでなく）友達に教えてもらいながら理解して答えることができました」「残りの問題を解いてから友達に教えてあげることができた」

②を選択した生徒：「問題を教科書とかを見ながら頑張りました」「自分で『こういうことなんだな』と理解できるように頑張りました」

③を選択した生徒：「ノートに書いて復習した。全体的に合っている問題が多かったのが良かった」「練習問題でやったことが（プリントの）注意で書いているところを見て理解することができ、問題の解き方が分かった」

マイプラン学習 数学Ⅰ 学習のてびき （単元：3章2節）					
1年1組 _____ 番 氏名 _____					
学習内容	プリント	教科書 (参考)	WRITE	スタサポ ベーシック レベルⅠ	Qubena
①中学校の復習	—	—	—	(中3 2次方程式)	中3 2次方程式
① 2次関数のグラフと x軸の共有点	p1~3	p108~112	p57~59	第9項 2次方程式	中3 2次方程式
② 2次関数のグラフと x軸の共有点の個数	p4~7	p113~117	p60~62		
③ 2次不等式 1	p8~9	p118~120	p63~64	第10講 2次不等式	—
④ 2次不等式 2	p10~11	p121~123	p65~66		
⑤ 連立不等式	p12~13	p124~125	p67~68		

実践例２）朝学習の持ち方を工夫

自学自習の習慣化のため学年ごとにやり方を検討して朝学習に取り組む。

1 学年：毎日朝読書

2 学年：月水は朝読書。それ以外は I C T教材または紙媒体での取り組みリストを月ごとに提示。マイプラン朝学習スケジュールに記入しながら進める。

3 学年…各自のやるべきこととその目的・目標を週単位で記入しながら進める。

【令和6年度（3年次）の成果】

昨年度、一昨年度に実施したアンケートを今年度も実施した。単元の内容に興味をもち自主学習に取り組んだり、学習のやるべきことをきちんと理解したり、わからない問題も最後までやろうとしたりする生徒が増加しており、生徒の学習意欲の向上が図られていることが確認された。

「学ぶ意欲」	R4	R5	R6
やる気が下がった	0%	3%	3%
授業において指示されたことを行った	73%	54%	56%
積極的に問題を解いた	20%	32%	27%
授業以外の時間にも自主学習を行った	7%	8%	6%
単元内容に興味をもち、自主学習を行った	0%	3%	7%

「計画力」	R4	R5	R6
学習のやるべきことがわからないままだった	15%	4%	0%
学習のやるべきことがわかった	63%	63%	71%
学習にどれくらい時間が必要か予測できた	20%	19%	18%
予測を基に学習の計画を立てた	2%	7%	4%
学習計画を実行に移した	0%	7%	7%

「やり抜く力」	R4	R5	R6
学習をやろうとしなかった	6%	3%	8%
わからない問題をそのままにした	4%	7%	5%
わからない問題も最後までやろうとした	51%	56%	73%
わからないところがあっても諦めずに最後までやり遂げた	27%	15%	0%
できないところ、わからないところを繰り返し取り組んだ	12%	19%	15%

A I 教材活用において、重点的に取り組んだ教科は数学である。数学 I においてマイプラン学習を導入し、学習方法を毎時間選択したことで、生徒が自分に合った学習スタイルで理解を深めることにつながり、その結果、数学への動機づけの度合いが、上位層・中位層・下位層それぞれで高まっていることが分かった。

A I 教材は、Qubenaは長期休業課題や自主学習、単元初めのレディネスチェックとして、tokumoは配信課題や授業内容の復習問題、定期テスト対応の自主学習として生徒に合わせたの活用を促したところ、特にQubenaは、中学校段階での基礎的知識に不安があると感じている生徒にとって取り組む課題として有効であり、生徒の学習意欲を想起する一助となった。

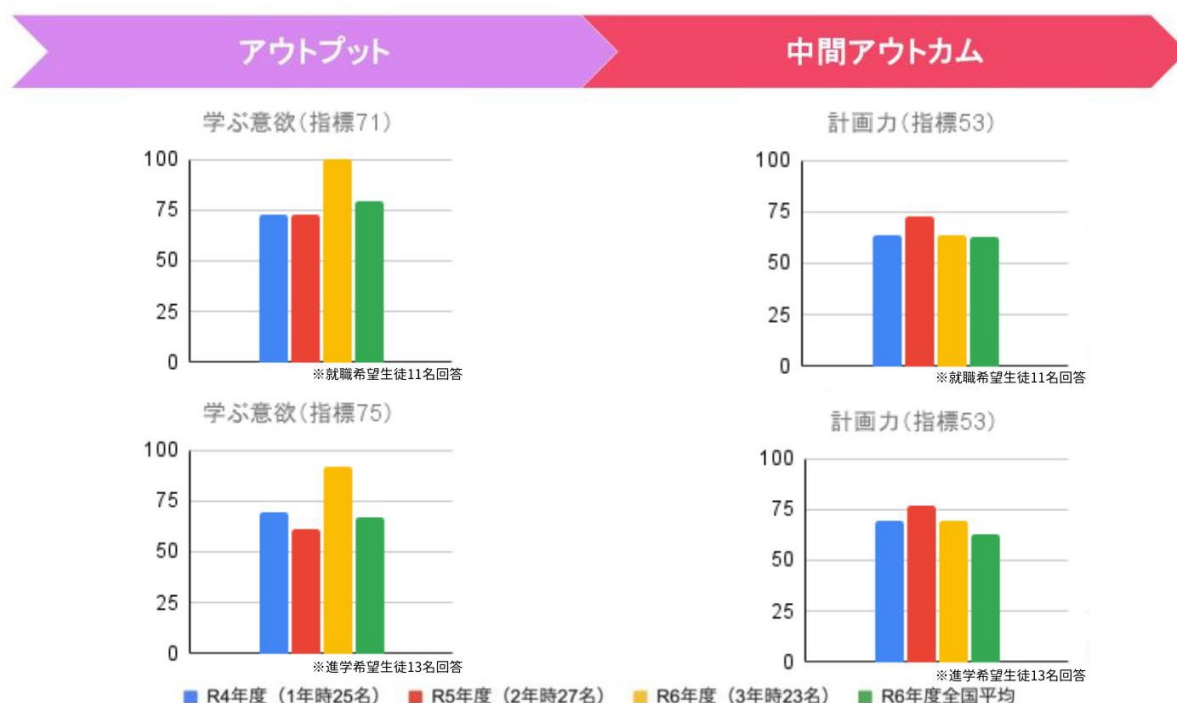
数学の他では、1 年生の理科においても、高校での学習を進めるにあたり中学校での既習事項の内容をQubenaの出題範囲として示すことで学習の深まりを期待して取り組むことができた。

【令和6年度（3年次）の課題】

A I 教材を活用した取組が数学を主としたものであり、学校としての体系化には至らなかった。生徒個々の学習特性として、紙に印刷した学習プリントの方が取り組みやすい生徒、教員の説明を聞きながら理解した方が学びやすいと感じる生徒が一定数いるため、授業内でA I 教材を全員が活用することが出来なかった。しかし、A I 教材は生徒にとって使いやすい教材の一つであり、生徒の学習特性に応じた個別最適な学びを推進する新たな学習ツールであると感じた。

【ロジックモデルにおけるアウトプットとアウトカム状況】

本事業に取り組み始めた令和4年度入学生の3年間を「高校魅力化評価システム」によるアンケート結果より追跡調査してみると、アウトプットとして設定した「学ぶ意欲」は伸びてきているが、それに対しアウトカムとして設定した「計画力」は3年時が伸びていなかった。これは目標設定を行ったり目標達成のための計画性を高めたりするためのアクティビティを2年時の後半から3年時の前半にかけての時期に今以上にカリキュラムへ意図的に組み込む必要があることを示している。



2. 教科等横断的な学びの推進

【令和6年度（3年次）の概要】

令和5年度の実践をもとに行った職員研修会の中で、令和6年度は次のようなねらいと方法で、全教員が学期に1回以上教科横断型授業を行うこととした。

[ねらい]

教科の枠にとらわれない魅力的な本校独自の授業実践について研究する

- 各教科の特色を活かしながら、教科横断的視点を持たせることで生徒の資質・能力の向上を図る。
- 教科の枠を超えた授業に触れ、各教科への興味・関心を向上させて、学習の動機付けにつなげる。

[実践方法]

- ① 地歴・公民、家庭（軸となる教科）の年間の授業計画の中で、専門的な説明を要する分野について、他教科の教員を招聘して詳しい説明を行う。
- ② 時事的な内容をテーマに据えて複数教科でチームを組み、それぞれの教科の視点で授業を行う。
- ③ 各授業担当者がニーズに合わせて自由に他教科の教員またはその他の職員とチームを組み合同で授業を行う。
- ④ 前年度に行った教科横断授業と同じものをブラッシュアップし、前年とは別のクラスで行う。

〔実践した授業事例〕

事例１）文学国語と数学Aの教科横断型授業「論理的とは何か」

＜文学国語＞ 三段論法という型を使って、どんな思考法なのか、それはどんなときに必要か、成り立たないパターンは何かを考える。	言葉自体は聞いたことがあっても、具体的に言語化できない「論理」。三段論法をどう活かすかを考える。
＜数学A＞ 集合と論証の分野で勉強したベン図を活用して命題の真偽を可視化する。	
＜生徒の感想や担当教員の見取り＞ 生徒1) 授業前：論理的とは「作成者の考えに沿って答えを出していく」とワークシートに書いていた。 授業後：振り返りでは「大前提がおかしいと小前提まで崩れる、大前提は大きくなければ論理的にならないなとおもいました。」と述べており、根拠自体だけでなくその関連も正しくなければ論理的にはならないことに気づいていた。 生徒2) 授業前：論理的とは「感情的にならない」とワークシートに書いていた。 授業後：振り返りでは、論理的とは「物事を自分の主観ではなく大まかなことから簡単に説明すること」だと述べており、論理の具体的な表し方や基本的な考え方を理解できていた。 生徒3) 授業前：論理的とは「感情的ではない。誰かに言葉だけで説明するときに必要」とワークシートに書いていた。 授業後：振り返りでは「大前提をもとに結論を考えて話すことだと思った。矛盾が起きないように話していくことだとわかりました。」と述べている。論理の基本的な考え方や、それが使われるのは限られた場面ではないということを、教科横断の授業を通して身に着けていた。 ＜授業者の感想、授業における工夫、学習の成果、今後への課題＞ 1時間の国語数学合同授業の中では、時間が短く内容が伝わったかどうか心配だったが、正しい三段論法を作る時間には、しっかり考え様々なアイディアを出してくれた。ひとりではなかなか理解やアイディアが出ない生徒も、グループで共有しながら全員が三段論法を作った。後日数学単独での補足の授業を行い、理解が深まった。 生徒が1つの題材を2つの教科の特性から理解できるよう意識した。生徒に例を示しながら「どこがおかしいところはないか?」「なぜおかしくなってしまうのか?」という問いかけをしたことでアイディア出しがスムーズにいった生徒が多かったように感じる。結論が正しいか、3つの文の関係は正しいかということだけでなく、そもそもの前提が正しいのかを吟味する時間を設けると、より理解が深まったのではないかなと思う。	

事例２）政治経済とビジネス基礎の教科横断型授業「目指せ、株価マスター！」

＜政治経済＞ 各グループで行っている株式学習の本日時点での株価を確認し、損失と利益の推移を確認する。	株価はなぜ変動するのかを考え、２学期以降の株式学習に生かし、株価マスターを目指す。
＜ビジネス基礎＞	

株価が変動する原因は？株を買うには何を参考にしたらいいの？	
<生徒の感想や担当教員の見取り> 生徒1) 授業前：知識がまったくなく、投資する会社を名前で選んだ。 授業後：ニュースや時事の話題に耳を傾けようと思った。考えて投資したい。 生徒2) 授業前：好きな会社を選んだ。株価が上がりそうという直感で選んだ。 授業後：日本や世界の情勢に興味を持つ必要を感じた。会社の状況を分析できるようになりたい。 生徒3) 授業前：半導体が伸びると予想して選んだ。 授業後：世の中の需要を見て投資するようにしたいと思った。情報収集が大事だと思った。 <授業者の感想、授業における工夫、学習の成果、今後への課題> 株と聞くと「難しい」や「自分とは関係ない」などのイメージがあったが、日々の株価の変動は自分たちの生活と大きく関わっているということを理解してもらえるように授業を進めた。株価というのは社会的な見方だけでなく、商業的な見方も重要であり、生徒が多面的・多角的に物事を捉えることができるよう授業を展開した。生徒が卒業した後も、世の中の動きに常にアンテナを張り、様々な情報を主体的に習得できるような力を伸ばしていきたい。 財務諸表の分析には専門的な知識が必要だが、まったく学習をしていない生徒もいるので、図解を中心に授業を進めた。とくに総資本利益率は、株主からの資金を使ってどのくらい利益を稼いだのかを表す指標で、株価と密接な関係にあることを丁寧に説明した。様々な場面で金融教育が求められており、財務諸表などの数値を把握し分析する力を伸ばしていきたい。	

事例3) 体育と物理基礎の教科横断型授業「50m走分析 自己ベスト更新を目指す」

＜体育＞ 50m走タイム測定 ●再測定前に解析データをもとに助言 再度50m走実施→測定データ解析→課題/考察→発表→●再測定	科学的な視点を持つことにより、自己の身体能力の向上を体感する。
＜物理基礎＞ ①加速度運動を理解する。 ②科学的な視点を持つことにより、自己の能力を向上させることができるようになる。	
＜生徒の感想や担当教員の見取り＞ 生徒1) 授業前：走っている途中で減速している区間がある。 授業後：頭が固定されていないから、しっかり前を向いて走る。 生徒2) 授業前：最後まで走りきれていない。足の力の方向が前ではなく、地面と垂直になっていて推進力を殺している。 腕を全然振っていない。足の回転速度が遅い。 授業後：最後のほうが失速しているので最後までしっかり走り切る。動画をみたら推進力が前ではなく上に行っていたので、前を意識して走る。スタートダッシュのときや走っている途中に、一番力が出せる体勢や足の出し方などを研究する。 生徒3) 授業前：足音がでかい。同じ場所を見ていない。30m地点で遅くなっている。前傾姿勢じゃない。バネの力が無い。50m付近でかなり減速している。肩に力が入っている。全体的に力が入りすぎている。 授業後：足音を大きくしないように注意する。同じ場所を見る。前傾姿勢を意識する。腕の振りは左右にブレ（ハの字にならない）ないように前後を意識する。走行時の腕は自分の視界に入るか入らないくらいを意識して振り上げる。無駄な力を入れない。腿を上げる。 ＜授業者の感想、授業における工夫、学習の成果、今後への課題＞	

授業前は生徒全員が何も考えずに走っていた。区間毎の速度とフォームを分析することにより、課題と改善方法を考察することができた。科学的な視点を持つことにより、自己の能力を向上できることを認識できた。夏季休業直前に再測定する予定であったが、梅雨のためグラウンドコンディションが悪く、実施できなかったことが残念である。

事例４）授業研究会（令和６年９月５日（木））における教科横断型授業（公開授業）

本事業の取組について、保護者や近隣小中学校教員、地域住民の理解を促進し、また、事例紹介によって本事業による効果を普及するため、公開授業及び授業研究会を開催した。

２校時、３校時は全学年で、AI教材を活用した個別最適な学びを中心にした授業を公開した。４校時は３年１組の地理探究を研究授業として公開した。研究授業の単元名は「発展途上国の都市問題 ～ルサカのコンパウンドではなぜコレラがまん延するのか～」であり、養護教諭による公衆衛生学を含む教科横断型授業としての単元であり、４時間配当のうち第３時を公開した。

第 １ 時	○発展途上国の居住・都市問題	・発展途上の国々で感染症が流行ってしまっている。ではなぜ感染が拡大してしまうのか？実際に現地の様子はどうか？この疑問を実際にザンビアに行ってきた先生と考えてみる。 ・ルサカのコンパウンドの現状について理解を深める。
第 ２ 時	○世界で流行する感染症 （養護教諭より）	・コレラなど発展途上国で蔓延する感染症について理解を深める
第 ３ 時	（研究授業） ○ルサカのコンパウンドではなぜ感染症が蔓延するのか	・第１時と第２時で学習した知識を用いて、コレラが蔓延する原因を考える。
第 ４ 時	○感染症の蔓延を防ぐために ○まとめ	・日本との相違点、共通点を考える。 ・防ぐためにはどんなことが必要かを考える。

授業研究の成果としては、保護者及び近隣小中学校から15名程度の参加があり、本事業の取組について理解を得ることができた。また、研究授業を実施校の全教員が参観し、事後研究会を行うことで、校内で事例をもとにした目線合わせができた。単元の最初、生徒はコレラという言葉は聞いたことがあってもどのような感染症か想像できなかったようである。養護教諭から、公衆衛生学としてコレラ予防を習うことでイメージを持つことができ、その後の授業への取組の真剣さが増していた。そのような生徒が学びに集中していく様子を教員が目当たりすることで、各教員が教科横断型授業を実践していくにあたり創意工夫を凝らしていく動機づけとなったと考える。また、教科書にはザンビアの衛生事情については掲載されていないが、本単元は担当教員が実際に現地へ赴いた経験をもとに教材化を図ったものであり、教員の指導力向上という点でも有効に機能したと言える。

〔令和６年度（３年次）の教科横断型授業の実践一覧〕

学年	授業方法	科目	氏名	テーマ等	紹介文	実施月日
3年	①軸となる教科	生活と福祉	加藤真央	「健康の社会的決定要因」	健康の社会的決定要因について、テーマごとに分かれグループ学習を行った。その際、他教科の視点を取り入れるため、他教科の先生から多様なアドバイスをいただき、学びを深めた。	5月16日（木）

2年	③ニーズ でチーム	体育	長岡郁子・ 橋本陽貴	「50m走分析 自己 ベスト更新」	新体力測定に向けて、体 づくり運動の中でダッシ ュや走りの動きづくりを 練習しました。	5月13日(月)
		物理基礎	蝦名恵介		科学的な視点を持つこと により、自己の身体能力 の向上を体感する。	5月28日(火)
2年	②時事的 なテーマ	ビジネス英 語Ⅰ	舟山知美	「新聞を用いての 英語ライティン グ」	日本の新聞記事を読み、 感想を英語で書くこと で、生徒にとっての教科 横断を図りました。日本 のニュースについて海外 の学校への発信にもつな げます。	6月18日(火)
2年	④前年度 のもの	文学国語	五十嵐遥佳	「論理的」とは何 か考える	言葉自体は聞いたことが あっても、具体的に言語 化できない「論理」。三 段論法という型を使っ て、どんな思考法なの か、それはどんなときに 必要か、成り立たないパ ターンは何かを考えま す。	7月16日(火)
		数学A	佐藤喜紀		集合と論証の分野で勉強 したベン図を活用して命 題の真偽を可視化しま す。三段論法ではどう活 かされるでしょう。	
3年	①軸とな る教科	政治経済	高橋謙介	株価はなぜ変動す るのか？	株価が変動する原因は？ 株を買うには何を参考 にしたらいいの？目指せ株 価マスター！	7月18日(木)
		ビジネス 基礎	松田明子			
2年	①軸とな る教科	家庭総合	加藤真央	子どもを保護の対 象から、権利の主 体へ！～子どもの 人権を考える「虐 待」～	「虐待」の学習に公共 の視点を取り入れ、「寛容 の精神」や「非暴力」と 関連させながら、理解を 深めよう。	6月3日(月)
3年	②時事的 なテーマ	地理探究	高橋謙介	昆虫食(eating insects) の世界的な広がり と地域における様々な昆虫食の歴史と文化に ついて ・地理探究では、主に世界の昆虫食の広がり について学ぶ ・英語コミュニケーションⅢでは、主に日本 国内(都道府県)の昆虫食の広がりについて 学ぶ		7月8日(月)
		英語コミュ ニケーショ ンⅢ	鈴木武志			

3年	①軸となる教科	フードデザイン	加藤真央	メキシコにルーツがあるALTのメリッサ先生にメキシコ料理を学び、他国の食文化に触れる。	メキシコにルーツのあるALTの先生から本場のメキシコ料理を学び、他国の食文化に触れる。そして、英語を交えた調理実習を通して、料理技術だけでなく英語力も鍛えよう。	7月19日(金)
		ビジネス英語Ⅱ	高橋泰弘、メリッサ			
3年	①軸となる教科	地理探究	高橋謙介	発展途上国の都市問題～ルサカのコンパウンドではなぜコレラがまん延するのか～	発展途上国の国々で感染症が流行ってしまっている。それは教科書にも載っているからそんな事実は知っている。ではなぜ感染が拡大してしまうのか？実際に現地の様子はどうなのか？この疑問を実際にザンビアに行ってきた先生と考えてみよう！教科書はいらない、自分の目で見て、考えて、今この世界で起きている現状を考えよう！	9月2日(月)～9月6日(金) 計4時間
		養護教諭	水口明夏			
3年	①軸となる教科	地理探究	高橋謙介	東南アジアの経済発展と変化	やっぱり実際に現地に行った人の話の方が楽しいよね？今回は東南アジア代表松田先生です！	10月8日(火) 2校時
		商業	松田明子			
3年	①軸となる教科	地理探究	高橋謙介	インド	インドといえば数学といわれるのはなぜか？数学の歴史やインドの教育からその秘密を解き明かしてみよう。	10月16日(水)
		数学	佐藤喜紀			10月18日(金)
2年	②時事的なテーマ	物理基礎 政治・経済	蝦名恵介	「原発0の影響と2024衆議院選挙における各政党の方針」	原子力発電のしくみと課題を知る。原発0の影響を考慮して、自分の意見を反映させる行動(投票)を考える。	10月8日(火)
3年	③ニーズでチーム	体育	長岡郁子 橋本陽貴	誰もが「楽しめる」「喜ぶ」スポーツをつくろう	地理探究で学んだ世界の祭りやニュースポーツ体験、今までの運動経験を活かし、既存のスポーツの組み合わせやルール工夫で、誰もが「楽しめる」「喜ぶ」スポーツを考え、クラス皆で実践します。	10～11月
		地理探究	高橋謙介			通年

3年	②時事的なテーマ	文学国語	佐藤佳代	史記「四面楚歌」	故事成語には歴史ドラマがあり、その言葉には血が通っている。バックボーンを知れば言葉が躍動してきます。	10月15日
1年	③ニーズでチーム	保健	橋本陽貴	精神疾患の特徴・予防・回復	相手の言動や変化に気づく実践的な学習	10月2日
		養護教諭	水口明夏			
3年	③ニーズでチーム	生活と福祉	加藤真央	一生歩き続けられる足づくり	適切な爪の切り方を知っていますか？本当に自分の足に合った靴を履いていますか？身体の1/4の骨は足にあり、私たちの身体を支えています。足育てのプロから教わり、自分の足を知り元気な足を育て自分の足で歩もう！	11月5日
		体育	長岡郁子、橋本陽貴			
2年	②時事的なテーマ	英語コミュニケーションⅡ	鈴木武志	①家庭のコンポストから地産地消の野菜生産作り ②地元野菜を使ったスイーツ作り ③伝統野菜の継承	地元（西置賜地区）の高校生が取り組む地産地消、循環型社会、伝統野菜の継承について何ができるか、具体的な取り組みを知ろう。	10月15日
3年	③ニーズでチーム	ビジネス基礎	松田明子	外国人観光客の増加について	日本を訪れる外国人観光客は増加している。その事実をどう捉えるか？我々にとってどんなメリット／デメリットがあり、どう向き合っていくべきか？時事的な話題に触れながら視野を広げ、自分の考えを発表しよう。	11月25日
		国語表現	五十嵐遥佳			

【令和6年度（3年次）の成果】

教科書にはない学習課題が提示され、生徒にとって興味深い内容であることが多く、生徒がいつも以上に主体的に参加している様子が見て取れた。また、授業後の生徒の振り返りの記述の中には、複数の教科や観点から自分の考えや感想を述べているものが数多く見られ、生徒の多面的・多角的な視点の獲得につながっていることが伺えた。

今年度は、令和4・5年度よりも多くの授業実践を行うことができ、教員が日常的に教科横断型の授業を意識するようになり、また、職員研修でのスキルアップも後押しとなり、協働して授業開発を行う姿も見られた。令和7年度以降も教科横断型授業を各教科の授業計画に取り入れていく素地ができたと考える。

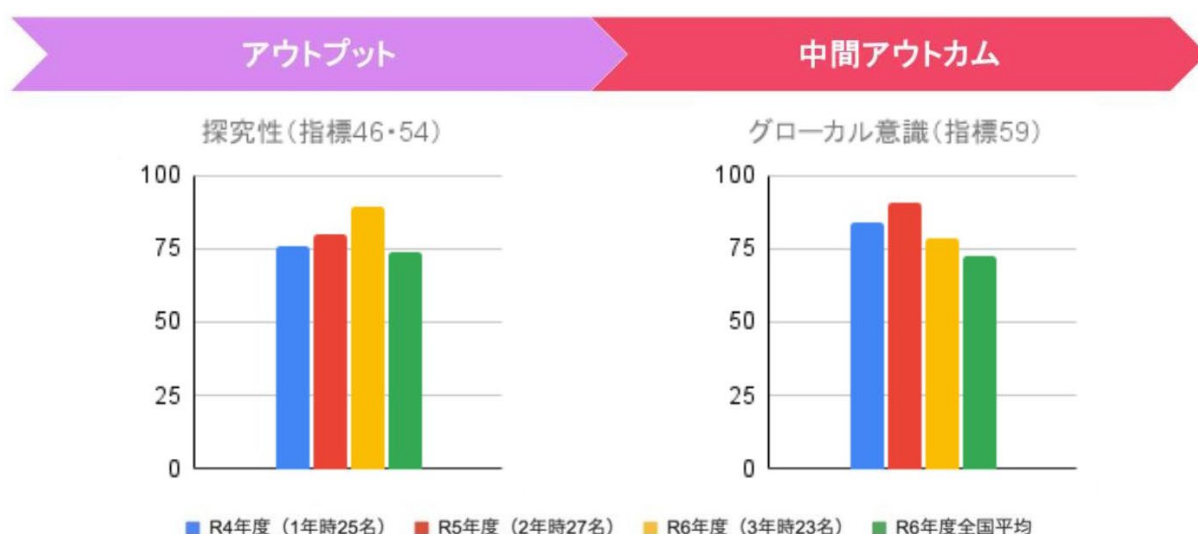
【令和6年度（3年次）の課題】

最も大きな課題としては、学校全体のカリキュラムにはまだなっておらず、散発的な実践にとどまっていることが挙げられる。各教科の令和7年度シラバスを作成する際、学校教育目標の達成を目指して教科横断型授業を年間で位置づけたものとするよう準備していくことが必要である。

また、生徒の思考を深める問いや学習課題の設定にさらなる工夫が必要であり、教員の教材研究が今後も求められる。

【ロジックモデルにおけるアウトプットとアウトカム】

本事業に取り組み始めた令和4年度入学生の3年間を「高校魅力化評価システム」によるアンケート結果より追跡調査してみると、アウトプットとして設定した「学んだものを他教科で活用する企画ができる」や「多くの立場から考えようとする機会が増える」等の「探究性」は伸びてきているが、アウトカムとして設定した「グローバル意識」は3年時で降下していた。3年時に世界を視野に入れた学習課題に取り組みや多様な人たちとの交流などを行い、より地域の課題解決や社会貢献に向かう意識を養うよう、教職員の共通理解を図る必要がある。



3. 学校横断型探究オンライン合同授業の実施と進学希望者の学びの動機喚起

(1) 学校横断型探究オンライン合同授業の実施

【令和6年度（3年次）の概要】

探究における小規模高校の教育課題を解決するため、認定NPO法人カタリバと連携し、ICTを活用して学校同士をつなぎ、多様な教育資源を共有しながら興味・関心に応じて生徒が学び合いを行う学校横断型探究学習を行った。今年度の参加校は全国36校（1都1道1府19県）と大幅に増加したため、交流する高校は固定化せず、授業のタイミングの合う高校でグループを組むため毎回変更となり、交流の幅が広がった。連携内容は、①年3回の合同授業（オンラインによる相互支援）と2次元メタバースを活用した授業時間内での日常的な交流（メタバース相談部屋）、探究活動の深まりや意欲の向上のための放課後ゼミ、多様な大人と接続するコアサポーター制度等であった。更に、生徒だけでなく、教員向けの合同勉強会（合同研修、自主勉強会・交流会等の「探究コモンズ」）や連携校探究実践の共有（事例・資料共有「探究ライブラリ」）も行われた。

今年度参加校

KATARIBA
Meet the Future

北海道・東北

- 北海道池田高等学校
- 北海道鹿追高等学校
- 岩手県立大槌高等学校
- 岩手県立前沢高等学校
- 岩手県立遠野緑峰高等学校
- 岩手県立金ヶ崎高等学校
- 岩手女子高等学校
- 山形県立小国高等学校
- 山形県立新庄南高等学校金山校
- 山形県立遊佐高等学校
- 福島県立只見高等学校

関東

- 茨城県立小瀬高等学校
- 埼玉県立越生高等学校
- 栃木県立足利特別支援学校
- 中村高等学校（東京都）
- 星槎国際高等学校八王子学習センター（東京都）
- 第一学院高等学校横浜キャンパス（神奈川県）

中部

- 静岡県立川根高等学校
- 静岡県立松崎高等学校
- 長野県阿南高等学校
- 長野県軽井沢高等学校
- 愛知県立足助高等学校
- 片山学園高等学校（富山県）

関西

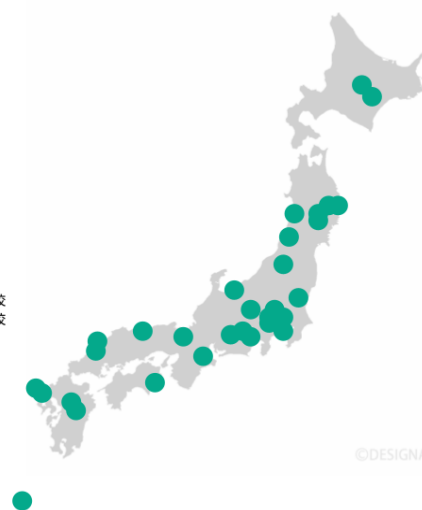
- 京都府立須知高等学校
- 三重県飯南高等学校

中国・四国

- 鳥取県立青谷高等学校
- 島根県立浜田商業高校
- 島根県立吉賀高等学校
- 徳島県立那賀高等学校

九州

- 長崎県立松浦高等学校
- 長崎県立猶興館高等学校
- 長崎県立宇久高等学校
- 宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校
- 鹿児島県立沖永良部高等学校
- 熊本県立小国高等学校
- 熊本県立天草拓心高等学校



※一部学校はメタバース探究部屋もしくは放課後マイプロゼミのみの参加

6

2024年度の年間スケジュール

KATARIBA
Meet the Future

時期	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
①合同授業	顔合わせ ・ 接続テスト		第1回 探究テーマ共有会 (6～7月)			事前 打ち合 わせ	第2回 探究ブラッシュアップ 交流会 (10月～11月)			事前 打ち合 わせ	第3回 合同発表会 (1～2月)
②メタバース探究部屋	希望調査		授業時間内での開室（不定期／参加可能な学校を対象） 放課後開室（不定期／生徒のニーズに応じて実施）								
③放課後 マイプロゼ ミ	参加者 募集	1ターム目（5～7月）				参加者 募集	2ターム目（10～12月）				
④コアサポ	依頼方法 共有		依頼受付（要望に応じて、登録している外部サポーターとの接続対応）								
⑤探究 コモンズ	参加校の課題感ヒアリング →集合研修で取扱うテーマの決定				集合研修 (夏季休業中) 事務局企画		テーマ別勉強会（11月～2月） 連携校教員企画				
⑥探究 ライブラリ	年間を通じて、連携校より探究活動に関する資料・教材等を募集										

© 2024 Nonprofit Corporation KATARIBA

10

[オンライン合同授業の本校記録]

年月日	合同授業（内容）	交流校
2024/06/12(水) 13:30～15:20	第1回オンライン合同授業 (探究テーマ共有会)	茨城県立小瀬高校(35名)、埼玉県立越生高校(4名) 島根県立吉賀高校(35名)、徳島県立那賀高校(39名) 山形県立小国高校(28名)
2024/10/23(水) 13:30～15:20	第2回オンライン合同授業 (探究ブラッシュアップ交流会)	北海道池田高校(33名)、岩手女子高校(1年35名) 星槎国際高校八王子学習センター(20名) 山形県立小国高校(28名)
2025/02/20(木) 13:30～15:20	第3回オンライン合同授業 (合同発表会)	茨城県立小瀬高校(35名)、埼玉県立越生高校(4名) 徳島県立那賀高校(40名)、山形県立小国高校(28名)

【令和6年度（3年次）の成果】

第1回オンライン合同授業では、オンラインでの円滑なコミュニケーションにおける基本的な作法を学ぶとともに、今まで培ったコミュニケーション能力を発揮する場となったため生徒たちは自信を高めることができた。また探究につながる自らの興味関心を他校の生徒に発表し、質問やコメント等を交わしたことで今後の探究学習への意欲を向上させた。第2回オンライン合同授業では、探究学習の興味・関心が近い生徒同士でグループを作り、各自の探究活動を紹介し、意見交換を行った。生徒の感想では、「今までになかった新たな視点に気づくことができたり、全く違う探究テーマでやっている子の話を聞けて楽しかった」「自分のクラスの人にはない意見や考え、アイデアが多くてとても楽しかった」「将来の夢などの共通点があって共有できたことが楽しかった」「自分のテーマに共感してくれて自信が持てた」など、たくさんの学びや気づきを得ていた。第3回オンライン合同授業では、1年間の連携のまとめとして、それぞれの探究活動を発表したり、それを通じて得た学びを振り返ったりした。また、ゲストサポーターからの質疑応答やコメントを通じて、新しい気づきや発見が促される機会となった。全体的に、他校と連携することで少人数指導体制をカバーでき、生徒の幅広い興味・関心から始まる探究活動を支援する体制を構築することができた。その結果、生徒が自ら興味・関心のあるテーマを設定することができ、やる気や主体性を高めることができた。また、他者とのコミュニケーションを通じて、伝える力や聞く力を身に付けることができたことから、考え方や視点の異なる同世代からの感想や助言を受容し、探究活動への意欲向上や活動を進めるための手段やヒントを得ることができた。

【令和6年度（3年次）の課題】

参加校が増えたことにより、交流校が毎回変更になるため、他校の探究カリキュラムの理解や生徒のオンライン合同授業に臨む姿勢・意識に差があり、一番のねらいである探究学習の深化につながらない場面も見受けられた。運営のNP0カタリバや連携校での交流を密にし、オンラインでより良い教育環境を整備する相互支援について検討していく必要がある。

(2)進学希望者の学びの動機喚起

【令和6年度（3年次）の概要】

当初は、オンラインでの交流により、多様な考え方に触れたり、大学生・社会人のサポーターとの関わりを持ったりする機会をキャリア形成に活かし、特に進学者希望者の意識向上につなげたいと考えていたが、思うように参加希望者が見込めず、また交流会等の開催のタイミングが本校カリキュラムと合わないことが多かった。そのため、令和5年度から本校と小国町（白い森学習支援センター）、リクルート（スタディサプリー）の三者連携による進学意識・志の涵養と学力向上を目的に進学希望生徒を対象にした「目標達成プロジェクト」を立ち上げた。令和6年度もプロジェクトを継続。リクルート職員によるガイダンスやスタディサプリーの到達度テストをWEB実施にし素早い結果のフィードバックを行い、小国町白い森学習支援センターによる学習環境・講師・国数英の講習・自習室の提供、更には教員との進路面談等による学習意欲の維持に努めた。

【令和6年度（3年次）の成果】

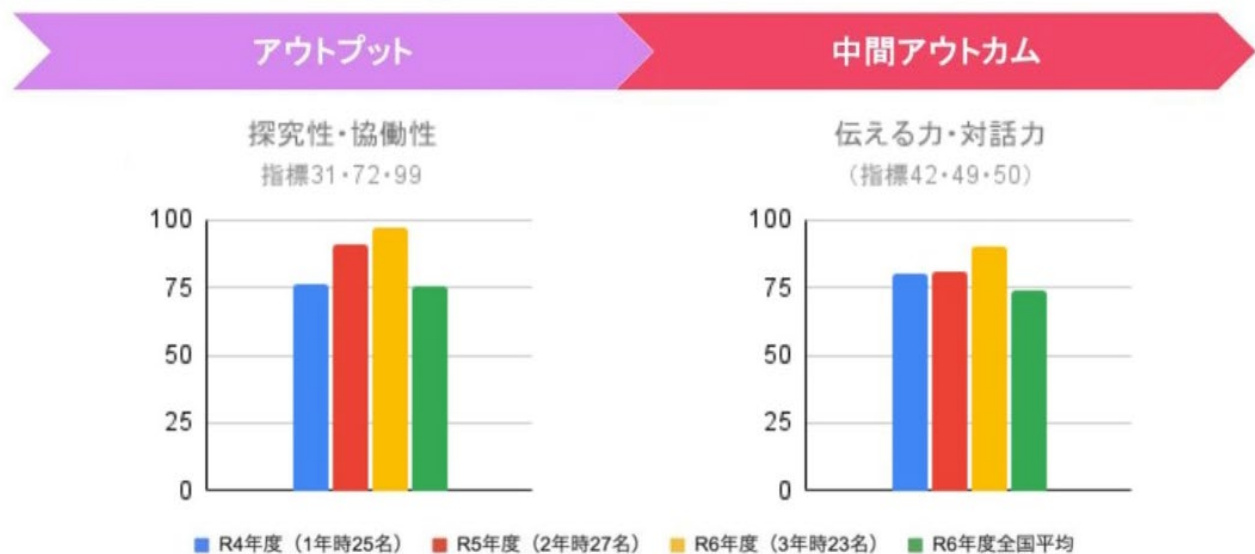
本校と小国町（白い森学習支援センター）、リクルート（スタディサプリー）の三者連携により、進学希望生徒の意識を喚起することができた。特に1年生は、オープンキャンパスや夏期講習等に積極的に参加する姿が見られ、大学等への理解を深め、進路選択に必要な情報を得て、将来の目標を明確にする意識の向上が見られた。

【令和6年度（3年次）の課題】

生徒による主体的な取り組みとまでは不十分に感じる。進路実現に向けた強い動機付けについて研究する必要がある。

【ロジックモデルにおけるアウトプットとアウトカムの状況】

本事業に取り組み始めた令和4年度入学生の3年間を「高校魅力化評価システム」によるアンケート結果より追跡調査してみると、アウトプットとして設定した「多様な他者・価値観の接触」、「興味関心でつながる仲間の存在」、及びアウトカムとして設定した「伝える力・対話力」は順調に伸長していた。カリキュラム全体で「コミュニケーション能力」を培う場面が多いため、どの生徒も他者との対話に対して自信を深めていることが分かる。



令和6年度 学校横断探究プロジェクト
第1回オンライン合同授業『探究テーマ共有会』

1. 期 日 令和6年6月12日(水)
2. 時 間 13:30～15:20(5-6校時)
3. 場 所 Zoom
4. 参加生徒 合計 141名
山形県立小国高等学校 28名 茨城県立小瀬高等学校 35名
埼玉県立越生高等学校 4名 島根県立吉賀高等学校 35名
徳島県立那賀高等学校 39名
5. 目 的 小規模高校には地域資源と接続しやすいというメリットがある反面、多様な興味関心を持つ同年代や教員と出会うことが難しいというデメリットがある。そこでオンラインによる連携を活用し、それぞれの多様な興味関心に合わせたサポートができる体制を作る。今回は連携初回として、学校を超えて生徒同士が打ち解け合う機会とすることで、今後の研究学習への意欲を高める。また、聴く姿勢やオンラインコミュニケーションのマナーを身につけながら、互いの地域の違いや共通点を知る。
【学ぶ意欲】【対話力】
6. 内 容
 - ・ 目的説明、オンラインコミュニケーションの作法について
 - ・ 参加校代表者による学校紹介
 - ・ アイスブレイク(自己紹介、地元紹介、最近あった嬉しいこと等)
 - ・ 興味関心又は探究テーマの共有(なぜ関心を持ったのか、聞いてみたいこと等)
 - ・ 感想共有
7. 生徒の声
 - ・ 色々な考えに触れることができ、視野が広がった。
 - ・ みんな違う観点でテーマを考えていてすごく新鮮だった。アイスブレイクのときに少し電波の関係で進まなくなってしまったけど、積極的にこうしたらどうですか、など発言できた。みんなともフリートークなどで楽しく、相手のことをしれたので良かった。交流できてとても良かったと感じた。
 - ・ それぞれの関心のあることを話し合ったりすると自分のプロジェクトの改善点や新しい企画の材料になることが学べた
8. 状況写真



令和6年度 学校横断探究プロジェクト

第2回オンライン合同授業『探究ブラッシュアップ交流会』

1. 期 日 令和6年10月23日(水)
2. 時 間 13:30～15:20(5-6校時)
3. 場 所 Zoom
4. 参加生徒 合計 116名
山形県立小国高等学校 28名 北海道池田高校 33名
星槎国際高等学校八王子学習センター 20名 岩手女子高等学校 35名
5. 目 的 関心が近い生徒同士でオンライングループをつくり、各自の探究活動を紹介し、意見交換を行う。学校を超えて興味関心について交流することで、自身の探究を深めるヒントを得るとともに、学び合うことができる多様な同級生や伴走者と出会う機会とする。
6. 内 容
 - ・挨拶、オンラインコミュニケーションの作法
 - ・アイスブレイク(自己紹介、放課後の過ごし方、最近あったうれしかったこと)
 - ・探究活動共有
 - 取り組んでいるテーマ
 - これまでに起こしたアクション
 - これまでにわかったこと
 - 今後の計画
 - 悩んでいること
 - 感想共有
7. 生徒の声
 - ・探究内容が違っていても、そのテーマ設定の元となった部分に、将来の夢などの共通点があり、共有できたことが楽しかった。
 - ・今まで和菓子という概念に囚われていたけど、今回の授業で視野が広がった。食べ物は色々な味があり、可能性がたくさんあるのでこれからもっと頑張っていきたい。
 - ・自分では全く考えもしなかった視点で計画を立てている人がいて、自分のプロジェクトだけではなく、今後の生活にも活用したいと思った。
 - ・小国町の印象や自分が気付かなかった新しい考えがあった。
8. 状況写真



4. 研修

本校では、「白い森人育成プログラム」と題してキャリア教育を行っている。生徒が「白い森人」を目指して学んでいるので、教職員も同様にという意味を込めて、職員研修のことを「白い森人研修」と称し、年4回実施した。

白い森人研修①～チームビルディング～

1. 期 日 令和6年4月2日(火)

第1部：10:00～12:00/第2部：13:30～15:30

2. 場 所 小国高校 地域協働ルーム

3. 参加者 教員、コーディネーター、寮アシスタント、高校魅力化推進室室長、高校魅力化推進室主査、カリキュラム等開発専門家(岡崎エミ氏)

4. 内 容

■第1部

- ・情報共有：グランドデザインについて(校長)
地域協働と地域みらい留学について(高校魅力化推進室長)
もりたんの成り立ちについて(長岡)
- ・ワーク①：「小国高校(生)だけでなく小国町も幸せを感じるためにどんなゴールを目指す
と良いのか?を」を未来志向で考える
その未来像に近づくためには、今年度の授業や活動でどんなことをしたらいいか具体的なアイデアを出す

■第2部

- ・情報共有：令和の時代に求められる「新たな教師の学びの姿」を実現する必要性について(岡崎エミ氏)
(国事業)創造的教育方法実践プログラム(これまでの取り組みと今年度の重点やテーマ)について(佐藤喜)
- ・ワーク①：今年度の国事業の具体的方策を決める(自学自習力をつける授業とは?)
生徒の学習への動機付けを高める仕掛けをもとに仮説を作る
- ・今年度の自分の目標(やるべきこと・やりたいこと)を設定し、全体共有

5. 状況写真



白い森人研修②～探究～

1. 期 日 令和6年5月17日(金)
2. 時 間 14:55～16:55
3. 場 所 小国高校 会議室
4. 参加者 全職員、コーディネーター
5. 目 的 本研修では、プロジェクトを立てる意味やプロジェクトの作り方について、生徒の立場に立って模擬授業を体験することで、学習者中心の授業づくりにつなげる。また、想定される生徒のつまづきについて考え、個別の伴走方法のイメージを持つ。
6. 講 師 岡崎 エミ氏(一般財団法人地域・魅力化プラットフォーム研究開発部研究開発員)
7. 内 容
 - ・ オープニング(講師自己紹介、趣旨説明)
 - ・ チェックイン(3～4人1組でチェックインカードを使用して行う)
 - ・ レクチャー(マイプロの流れを説明)
 - ・ 発表(グループに分かれリサーチクエスチョンの発表)
 - ・ ワーク①(リサーチクエスチョン作成までで難しかったことを共有)
 - ・ ワーク②(ワーク①の困難さの原因を出し合い、解決すべき課題を見つける)
 - ・ 振り返り
8. 受講者の声
 - ・ 複数枚あるワークシートの繋がりを教員は理解しているが、生徒は理解できていないのではないかな。
 - ・ 探究には個人差もあるので、全てのワークシートを事前に全員へ渡し、個人のペースで使えるようにしてはどうか。
 - ・ 生徒は多様な社会課題に触れることが少ないと感じる。授業内でも社会課題に触れることができる仕組みづくりをしていなかった。
 - ・ 週1回各教科の中で短いニュース等を動画視聴することで、社会課題に触れる機会をつくってはどうか。
 - ・ 大人は知識量も多い為、プロジェクトを立てやすいが生徒は難しく感じていると思う。探究の先行事例を動画で視聴することで探究の流れや方法を理解できるのではないかな。
 - ・ 先輩のプロジェクト動画を視聴した後に『WILL・CAN・NEED』に振り分けることで、理解が深まり、書き出しやすくなるのではないかな。
9. 状況写真



白い森人研修③～伴走～

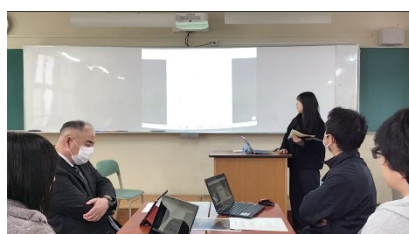
1. 期 日 令和6年8月20日(火)
2. 時 間 9:30～11:30
3. 場 所 小国高校 会議室
4. 参加者 全職員、コーディネーター
5. 目 的 本校では「挑め、ともに！」をテーマに、生徒が様々なことに挑戦する過程で、教職員が「伴走者」として支援することを重視している。特に、生徒の自主的な取り組みを尊重し、問題解決を重視した指導が行われている。ただし、伴走には定型的な方法はなく、生徒一人ひとりに合った支援が求められる。そのため、教職員がどのような心構えで生徒と向き合うかが重要。今回の研修では「なぜ伴走するのか」を考え、教職員の生徒観や学習観を見直す。
6. ファシリテーター 山科勝校長
7. 使用する文献 佐伯 胖(2004)『「わかり方」の探究-思索と行動の原点-』小学館
7. 内 容
 - (1) アイスブレイク
 - (2) 文献の中から第3章第1節「遊ぶ」ということの意味」を読み、それぞれがなるほど、と同意できる文章、②大事なことを述べていると感じるが意味を十分理解できない文章、③読んで理解できなかった文章に傍線を引く。
 - (3) 3～4人のグループで①～③を紹介し合い、①～③についての解釈やお互いの考えそれに関連した具体的な事例を述べ合う。
 - (4) いくつかのグループからグループで話題に上がったことを紹介してもらい、さらにグループで話し合い、伴走する意味や大切さ、教職員の心の持ち方について、一人ひとりの考えを深める。
8. 受講者の声
 - ・生徒のアプリシエーションがより感じられるために、大人がどのように伴走すべきか意識していきたい。
 - ・本校生徒の励みにはどのようなものがあるのかを、生徒の様子から見取っていきたい。
9. 状況写真



白い森人研修④～2学期振り返り～

1. 期 日 令和6年12月23日(月)
2. 時 間 13:30～15:30
3. 場 所 小国高校 3年1組教室
4. 参加者 全職員、コーディネーター
5. 目 的 本校教職員が参加した外部研修や視察等で得た情報や知見を校内で共有することで、今後の本校の教育活動に役立てる。また、現在検討しているカリキュラム構想の進捗報告を受けて、本校の教育活動についての内省や本校の特色・魅力を再認識し、3学期ならびに次年度の取り組みにつなげる。
6. 内 容
 - (1) 各種研修・視察等報告
 - 海外研修参加報告 報告:高橋謙介教諭
 - ・教師海外派遣事業(ザンビア、2024年度JICA東北・JICA二本松教師海外研修)
 - ・中国政府日本教職員招へいプログラム(文科省委託 令和6年度新時代の教育のための国際協働プログラム初等中等教職員国際交流事業)
 - 学校視察報告
 - ・秋田県立仁賀保高校 報告:佐藤喜紀教諭
 - ・新潟県立中条高校 報告:長岡郁子教諭
 - ・山形県立遊佐高校 報告:水口明夏養護教諭
 - ・遊佐町役場 報告:片岡隆史コーディネーター
 - (2) カリキュラム検討ワーキンググループによる協議の進捗報告
報告:舟山知美教頭
 - (3) 令和7年度グランドデザイン(素案)について 報告:山科勝校長
 - (4) 進学学習支援について 報告:松田明子教諭

7. 状況写真



第3部 評価

1. ロジックモデルによる分析と評価

①ロジックモデルの説明

令和4年度（1年次）に作成したロジックモデルについて、本事業最終年度にあたり、運営指導委員の協力も得て再度整理した（ロジックモデルはp. 7 参照）。

まず、インプットとして、本事業の他に、令和1～3年度「地域との協働による高校教育改革推進事業」の採択により投入された高校魅力化コーディネーターの配置やコンソーシアムの設置等が本校の教育活動の基盤となっているのが特徴として挙げられる。

アクティビティでは、本事業によりICTやAIなど新しい教育方法を活用し、「教科学習」「探究学習」「進路希望の実現」の個別最適化を実践し、小規模校特有の課題を克服することを目指したカリキュラムを展開した。また、前事業で開発した探究学習のカリキュラムと各教科学習との往還を図ることで、生徒の学びを深めていくことに努めた。

アクティビティの結果（アウトプット）として、生徒が自らの学習活動を振り返る機会の増加や他者と関わる機会の増加、将来の進路を見据える機会の提供等を見取ることができた。これにより生徒の学びの質の向上が期待できる。

中間的な成果（中間アウトカム）として、学びに対する意識の向上や自学自習習慣の定着、他者と協働する資質能力の高まり等につながると期待できる。

最終的な成果（最終アウトカム）として、意志ある進路選択（特に進学）できる生徒の増加や郷土に誇りと愛着を持ち、学び続けながらより良い地域づくりに主体的に関わる生徒、多様性や個性を認め、他者を尊重しながら協働できる生徒の育成につながり、本事業の目標達成だけでなく、地域が目標としている小国町と関わり続ける卒業生の増加（人口・関係人口増加）にも効果をもたらし、地域社会に貢献する人材の育成につながると期待できる。

②最終アウトカムの達成状況から見る評価

グラデュエーション・ポリシー（GP）ルーブリック指標での到達目標（レベル4）に到達した令和4年度入学生（現3年生）の割合は主体性95.8%、挑戦心79.2%、協働力87.5%と極めて高い割合であった。レベル4以上の回答をした生徒の理由は以下の通りであり、多くの生徒が自身の成長を認識していることが分かった。

「主体性」GPルーブリック到達（レベル4以上回答）とした理由	・授業だけではなく休日も、地域の行事やイベントに参加してきたから。 ・白い森未来探究学を通して地域の魅力を見つけることができたから。 ・地域の大人と関わりながら、自分の出来ることとニーズをつなぎ合わせて何が出来るか考えることが出来たから。また、今後も学び続け、地域社会に貢献したいと感じているから。 ・地元が好きになったから。
「挑戦心」GPルーブリック到達（レベル4以上回答）とした理由	・自分で課題を見つけ、最終目標を立て、その目標を達成するために自主的に行動ができたから。 ・物事を多角的にみる視野の広さや、第三者として俯瞰的に捉えることができるようになったことによって、見えるようになる新しい一面と可能性を自分の中にある知識や技術と結びつけて何か新しいものが出来る感覚が楽しかったから。 ・サミットのコアメンバーや、生徒会執行部の活動など、多くのことにわたって課題を見つけ出し、解決するためにどのようなやり方でやっていくかなどを考えて3年間生活してきたから。 ・アイディアを出し、新しい視点を持って活動できたから。 ・自分で考えて活動する機会が多々あって、そこで沢山のことを体験することが出来たから。 ・様々な活動を通して最後まで取り組むことができたから。

「協働力」GPルーブリック到達 (レベル4以上回答)とした理由	・年齢が違う人とでも意見を交わすことができより良い考えを生み出すことができたから。 ・特に留学生や移住者の方々とたくさん関わってきて、自分とは価値観の違う方と接して、互いに考えを尊重し、多くの学びをいただいたから。 ・授業などでも多様性について学んで、地域の方々との交流を通して学ぶことが出来たからです ・意見の違う人の話も聞くなど色々な人の意見を聞いて、多様な考えを尊重できたから。 ・何があっても、自分と違っていてもその人はその人という視点を忘れずに、生活することができたから。
------------------------------------	---

2. 高校魅力化評価システム活用2024の振り返り（令和6年8月集計）

①成果

- ・全体的に肯定的な回答の割合が高く、全国の他地域と比較しても高い割合を示している項目が多い。特に、主体性や探究性に関する項目が他地域と比べても10ポイント程度高い回答となっている。
- ・話し合った内容をまとめ、発表する活動について肯定的な回答が多い。
(本校 84.5% 全国 65.9%)
- ・「勉強したものを実際に応用してみる」ことに肯定的な回答が多い。
(本校 79.7% 全国 68.2%)
- ・授業で分からないことについて、自分から質問し自主的に調べ物を行うと回答している割合が多い。(本校 87.0% 全国 70.3%)
- ・新しい技術やサービスを生み出したいと考えている生徒が、本事業の経過とともに増加している。(本校R4 47.1%、R5 46.1%、R6 53.6%)

②課題

- ・客観的な証拠に基づき考え判断することや科学的視点から課題解決にあたることについては、全国の他地域と比較して肯定的な回答が少ない。
(本校 37.7% 全国 46.9%)
- ・現在の日常生活への不安や心配事がない生徒（実施校44.9% 全国53.5%）、日本の将来を明るいと思う生徒（実施校39.1% 全国46.7%）の割合が、全国よりも低い傾向にある。

第4部 今後の取組について

1. A I 教材の導入による教科学習の個別最適化

A I 教材については、令和 7 年度に小国町予算から援助いただき導入しているリクルート社のスタディサプリは全校生を対象に一人 1 台端末へ導入することとなっているため、活用方法について継続して研究を進めていく。個別最適な学びによる学び直しや学力向上のために、教科学習や朝学習での A I 教材の活用の仕方を体系化する。

2. 教科等横断的な学びの推進

教科横断型授業については、令和 7 年度以降も各教科のシラバスに年間を見通した計画として位置づけ、全教職員の協働体制のもと継続実施していくとともに、カリキュラムへの位置づけを検討していく。また、「白い森人研修」を通して教員の授業力向上の一環として授業のブラッシュアップを図り、教科横断型授業を公開し、県内外への普及を行う。

3. 学校横断型探究オンライン合同授業の実施と進学希望者の学びの動機喚起

学校横断オンライン探究学習については、令和 7 年度も認定NPO法人カタリバと連携して実施していく予定である。また、本校は、全国高等学校小規模校サミットを今後も毎年開催することとしており、全国の多くの小規模校との交流は継続するので、取組について全国各地の小規模校を対象に連携について協議することが可能と考える。この取組をとおして、メタバース相談室や放課後交流会等への生徒の参加促進を図るとともに、大人の交流会によって教員間の交流を進め、情報共有や事例検討を重ねる。

4. 事業成果の発信による全国の小規模校が抱える共通課題の克服

評価アセスメントとして活用している（高校魅力化アンケート）を継続し、分析することで、教育活動等による生徒の非認知能力への効果を検証していく。また、全国高等学校小規模校サミットを今後も毎年開催することとしており、全国の多くの小規模校との交流は継続するので、取組について全国各地の小規模校を対象に連携について協議していきたい。

第5部 資料

1. 運営指導委員会
2. 実践報告会
3. 全国高等学校小規模校サミット
4. 報道

文部科学省「新時代に対応した高等学校改革推進事業」

(創造的教育方法実践プログラム)

令和6年度 第1回運営指導委員会

1 期 日 令和6年6月3日(月)

2 時 間 13時20分～16時40分

3 場 所 山形県立小国高等学校会議室 ※ハイブリッド開催(Zoom 利用)

4 出席者数 23名

山形県教育局高校教育課主任指導主事、山形県教育局高校教育課指導主事、
小国町教育委員会教育振興課長、小国町教育委員会高校魅力化推進室長、
小国高等学校教員、コーディネーター

運営指導委員：(50音順)

阿部 剛志 氏(三菱UFJ リサーチ&コンサルティング株式会社)

稲垣 忠 氏(東北学院大学 文学部教育学科)

牛木 力 氏(一般財団法人つわの学びみらい 教育魅力化コーディネーター)

岡崎 エミ 氏(一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォーム)

5 内 容

(1)授業参観：家庭科(家庭総合)×地歴公民科(公共)

授業テーマ「子どもを保護の対象から、権利の主体へ！～子どもの人権を
考える「虐待」～」

(2)報告

(1)「高校魅力化アンケート」の時系列での傾向分析

(2)今年度の取り組み

(a)教科横断型授業について

(b)個別最適な学びについて

(3)個別最適な学びの現状と課題について

・各教科においての個別最適な学びの為に、具体的取組について各自検
討後、グループ共有

文部科学省「新時代に対応した高等学校改革推進事業」

(創造的教育方法実践プログラム)

令和6年度 第2回運営指導委員会

1 期 日 令和6年11月25日(月)

2 時 間 15:45~16:45

3 場 所 小国高校 会議室/zoom

4 出席者数 20名

山形県教育局高校教育課主任指導主事、山形県教育局指導主事、小国高校教員、コーディネーター

運営指導委員：(50音順)

阿部 剛志 氏 (三菱UFJ リサーチ & コンサルティング株式会社)

牛木 力 氏 (一般財団法人つわの学びみらい教育魅力化コーディネーター)

岡崎 エミ 氏 (一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォーム)

5 内容／指導・助言及び改善策の検討

(1)次年度に向けた課題について

(2)質疑応答

(3)その他

8 状況写真



文部科学省「新時代に対応した高等学校改革推進事業」

(創造的教育方法実践プログラム)

実践報告・公開授業 記録

1 期 日 令和 6 年 11 月 25 日(月)

2 時 間 12:50~16:45

3 場 所 山形県立小国高等学校会議室 ※ハイブリット開催(Zoom 利用)

4 出席者数 32 名

運営指導委員 4 名、山形県教育委員会 2 名、小国町教育委員会 2 名、一般参加者 11 名、小国高校教職員 13 名

5 内 容

1. 開会

2. 教科横断型授業参観

- | | |
|-----------|-----------------------|
| (1) 教科・科目 | 商業科(ビジネス基礎)×国語科(国語表現) |
| (2) クラス | 3 年 1 組 科目選択者(11 名) |
| (3) 場所 | 学習室 1 |
| (4) 担当教諭 | 松田明子 教諭/五十嵐遥佳 教諭 |

3. 教科横断型授業の協議

- (1) 授業者自評
- (2) 質疑応答
- (3) 講評

4. 創造的教育方法実践プログラムの取組報告について

- (1) 取組報告
- (2) 質疑応答
- (3) 講評

5. 閉 会

6. 状況写真



第7回全国高等学校小規模校サミット 2024.7.25Thu (小国高校体育館)

目的：「自分の学校・地域の魅力を伝え合う中で自信をつけ、新たな課題を見つける」
「サミットを各地域のためのアクションを起こすきっかけにする」

テーマ：「気づき築き」 グラウンドルール：「意見を尊重・肯定」「一議題一意見」

趣旨：全国の小規模高校の生徒が交流し親睦を深めると共に、各校・地域が抱える課題について意見交換し、将来それぞれの地域で活躍する資質や能力、協働意識を育成する。

大会主題：「今ここで起きていることは、将来日本中で起こり得ること、小規模校だからこそできることがきつとある」～仲間と一緒に未来を考えよう～

〈当日の流れ〉

- 1.開会式 2.アイスブレイク 3.セッション1【パネルディスカッション】モデレーター：若本 悠 氏 パネリスト：高校生4名
- 5.セッション2【参加校取組紹介】 6.昼食休憩 7.アイスブレイク 8.セッション3【生徒交流（ワークショップ）】
- 6.閉会式

〈参加生徒の感想〉

- ★自分の学校での課題と似ている課題が多くあって、そう言う課題を深く考えるきっかけになった
- ★全然違う環境で育ってきた人たちのお話をたくさん聞いて、自分の環境についても話して、視野が広がった
- ★人見知りで、初めのうちは自分から話しかけられなかったが、段々と慣れていき自分から話しかけたり友達になったりと、自分が変われた気がした
- ★小規模校について話しかうだけではなく、友達になった人とインスタやLINEを交換して話せたのが嬉しかった
- ★今の小国高校でもできそうなのが学べて、実際にやってみてよかった
- ★地域や学校の魅力についてたくさん話合えた

38

第7回全国高等学校小規模校サミット



成果

- ◆自己成長と人間関係の構築「コミュニケーション能力の向上／異なる地域や高校生と交流し、多様な価値観に触れることでの視野の拡大／自分の意見を積極的に発信し、グループワークを通して達成感と自信の獲得」
- ◆高校や地域の魅力再発見「自身の高校や地域の魅力を再認識し、愛着が深まる／地域貢献の重要性を実感／他高校の取り組みから学び、自身の高校で実践したい意欲の生起」
- ◆小規模校の可能性の拡大「小規模校ならではの強みや可能性を再認識し、今後の学校運営に活かしたい意欲UP／小規模校共通の課題や悩みを共有し共感／小規模校の未来への希望や期待を持てた」

展望

- ◆サミット後のフォローアップ活動「参加者同士の交流を継続する仕組みの構築」
- ◆参加者の確保「より多くの高校に参加の機会を提供し、多様な視点を取り入れる」
- ◆サミットの深化・発展「主催校の検討、サミットの変遷や効果の洗い出し」

〈小規模校サミットの軌跡〉

- 2017/12/15-16 岩手県立花泉高校との交流
↓生徒「もっと交流したい」の声から企画
- ↓東北芸工大 岡崎先生との出会い
- 2018/8/2 第1回（旧小玉川中学校）12校107名
- 「生徒が企画・運営、大人は伴走」のスタイルが定着
- 2019/7/31 第2回（松風館）17校132名
- ↓荒砥高生が実行委員として参加
- 2020/11/14 第3回（オンライン）21校194名
- コロナ禍でもICT機器を活用しオンラインで初開催
- 2021/10/23 第4回（オンライン）23校191名
- オンラインの利点を活かし、事前の研修・交流を密に計画実施
- 2022/7/28 第5回（南陽市民体育館）11校105名
- 3年ぶりの対面開催！配慮しながらもリアルで会う喜びを実感！
- 2023/7/27 第6回（南陽市民体育館）16校128名
- 5年ぶりの小国町開催＋小国高校を会場にして初！
- 2024/7/18 プレセッション（オンライン）
- 2024/7/24 レセプション（小国高校）著作＋タ食会（地元食材）＋花火

参加校 8県13校112名

（うち山形小国69名、ゲスト43名）

- 山形県立左沢高等学校
- 山形県立荒砥高等学校
- 山形県立遊佐高等学校
- 山形県立新庄南高等学校
- 山形県立新庄高等学校
- 宮城県岩ヶ崎高等学校
- 福島県立石川高等学校
- 福島県立西会津高等学校
- 福島県立那須高等学校
- 栃木県立白馬高等学校
- 長野県立油木高等学校
- 山形県立防府高等学校
- 佐波分校
- 高知県立大方高等学校
- 山形県立小国高等学校



小国高で学ぶ意気込み

「留学生」9人、町役場訪問

小国町の小国高（山科勝校長）で本年度から学ぶ、いずれも県外出身の「地域みらい留学365生」「白い森留学生」計9人が10日、町役場を訪れ、仁科洋一町長らに町の印象や意気込みを語った。

9人は国の地域留学制度などを活用した。365生は東京都と埼玉県、男女3人で、出身高校に在籍しながら2年生の1年間、小国高に通う。白い森留学生は東京都と神奈川県からの男女6人。同校生として3年間、同校で学ぶ。いずれも入寮やホームステイをしながら勉学に励み、住民とも交流する。

仁科町長は町の歴史や産業の成り立ちを紹介し、「自

然豊かな小国で、皆さんの能力を磨いてほしい」と激励。365生の染谷柚乃さん（16）＝埼玉県出身＝は「小国の人々温かい印象を

（坂元かおり）



記念写真に納まる小国高への「留学生」たち
＝小国町役場（同町提供）

受けた。7月に小国で開かれる全国高校小規模校サミットでの交流も楽しみ」と期待を膨らませた。

365生は8日の始業式で初登校し、白い森留学生は9日に入学式を迎えた。同校に通う留学生は、9人を含め19人となった。

令和6年4月12日
山形新聞
写真提供/山形新聞社

米に短期留学の 体験や学び報告

小国高生、町長に

小国

米コロラド州

デンバーに短期

留学した小国町の小国高（山科勝校長）の生徒2人が1日、町役場を訪れ、仁科洋一町長らに異文化に触れた感想や学びなどを報告

した。

2年の高橋安以太郎さん（16）と斎藤陽さん（16）の2人は3月8日から2週間、ホームステイしながら現地



短期留学での学びなどを報告した高橋安以太郎さん（手前）と斎藤陽さん
＝小国町役場

のイースト高の授業に参加するなどし、見聞を広めた。この日はホストファミリーやクラスメートとの交流の様子などをスライドで紹介しながら「試行錯誤の連続だったが、意思疎通ができた時の達成感は大きかった」「視野が広がり、もっと英語を学びたいと感じた」などと話した。仁科町長は「経験を糧とし、小国でさまざまなことに挑戦してほしい」と話した。

同校は国際学習に力を入れ、町や同窓会、後援会の支援を得て生徒の短期留学を実施している。（須藤仁）

令和6年5月3日
山形新聞
写真提供/山形新聞社

事故や犯罪 注意してね

小国高生ら、小学校で活動



登校する児童にポケットティッシュを手渡す小国高生
〓小国町・小国小

小国
小国町の小国高(山科勝校長)生徒有志が、近くの小国小で事故や犯罪被害の防止に向けた啓発活動を繰り広げた。

小国警察署(森本和幸署)

長と合同で取り組み、3年の飯田晴基さん(18)、いずれも2年の見川功真さん(17)、伊藤亜斗さん(17)、齋藤寧音さん(17)、染谷柚乃さん(16)が参加した。5人は昇降口前で登校中

の児童に向け、「おうちの方に行き先と帰る時間を教えてから遊びに行きましょう」などと、マイクで注意を呼びかけた。生徒がデザインしたイラストとともに「夏休みでもあいさつをしよう」などの注意事項を記したポケットティッシュも手渡した。

(須藤仁)

令和6年7月23日

山形新聞

写真提供/山形新聞社

小規模校の可能性探る

小国高 8県13高校集いサミット



5人の生徒が意見を交わしたパネルディスカッション
＝小国町・小国高

小国町の小国高(山科勝校長)による「全国高校小規模校サミット」が25日、同校で開かれ、本県や栃木、山口など8県13校の計114人が参加した。各校が小規模校ならではの特徴的な取り組みを紹介し、交流を深めた。

島根県教育魅力化特命官の岩本悠さんが講演し、「学校における一人一人の影響

た。また、小規模校の価値や可能性について話し合うパネルディスカッションも行われた。代表生徒5人は「地域と学校が互いに支え合い、課題を解決していく必要がある」「文化祭は出展数が課題。小規模校同士で協力するのはどうか」などそれぞれ語った。各校は独自の実践活動や、地域と協働の取り組みを発表した。小国高3年飯田晴基さん18は「他校の面白い活動やアイデアを取り入れたい」と話した。小国高が実行委員会事務局を務め、7回目。

(根本光輝)

令和6年7月26日

山形新聞

写真提供/山形新聞社

地域資源循環 じっくり

首都圏の大学生7人 小国滞在、稲作や畜産現場視察

首都圏の大学生が小国町に滞在して地域の実情に触れる「域学連携事業」が、5日まで繰り広げられた。参加者は町内の稲作や畜産などの現場を視察して資源の域内循環について理解を深めたほか、地元の高校生と地域の魅力について意見を交わした。



地域の魅力について語り合った大学生と小国高生
＝小国町・スポーツ交流センターアスネット

小国高生と魅力語り合う

町と大学が連携して地域資源の活用を考える事業をきっかけに始まった取り組み。早稲田を中心とした学生が町を訪れるなどの交流が続いており、今回は早大と法政大の学生7人が2日に来町し、牛ふんの堆肥化や敷料としてのふん殻利用などについて知見を広げた。

スポーツ交流センターアスネットでは、小国高生8人と交流会では、小国高生8人と交流し、地域の魅力について語り合った。大学生は地域の食や景色の感想とともに、視察先での体験を踏まえ「住民同士のつながりを生かした取り組みはサステナブルだと感じた」と語った。高校生も豊かな自然やマタギ文化などを紹介して打ち解けた。

早大4年馬場原瑞美さん②は「視察先の『助け合いだから』との言葉が印象深い。地域で資源が循環する仕組みの根本を感じることができた」と話した。小

国高2年伊藤亜美斗さん「い、地元を見直すきっかけ①は『見慣れた景色など』になった」と気付きを得たを良い面として挙げてもらよかった。（須藤）

令和6年9月6日
山形新聞
写真提供/山形新聞社

フランスの籠作り 高校生が文化学ぶ

2人、10日間滞在

小国町の小国高（山科）の生徒とフランス人の文化交流会が同校で開かれた。

フランス人の2人の籠作家らから、日本との生活様式や食文化の違い、籠作りの技術などについて学んだ。

フランス在住のファブリス・スラフィノさんと、ステファン・フォレドゥローさんの2人が、小国町の籠作家柳沢茜さんとフランスで出会った縁で、9月上旬に同町を訪れた。

町内でワークショップを開くなどし

て10日間過ごし、滞在最終日の20日に同校を訪れ、3年生20人と触れ合った。

柳沢さんが今年5月にフランスでワークショップを開き、1カ月ほど過ごした生活を説明した。フランス人の2人に質問を挟みながら、友人がそろった時によくガーデンパーティーを開催すること、おにぎりを作った材料はツナマヨが好まれたことなどを紹介した。最後にファブリスさんとステファンさんが、フランス産の柳の木で籠を作り、生徒に編み方を教えていた。

伊藤次郎さん（18）は「フランスの文化を学べる良い機会になった。2人が作る籠の編み目が細かく、高い技術だと感じた」と話した。

（根本光輝）



小国高の生徒に籠の編み方を伝えるフランス人の2人
＝小国町・同校

令和6年9月30日
山形新聞
写真提供/山形新聞社



表彰状を受け取る受賞者
Ⅱ米沢市・ホテルモント
ビュー米沢

小論文最優秀賞に
小国高の染谷さん
米沢有為会コンテスト
米沢有為会（平山英三会
長）が主催する置賜地区高
校生小論文コンテストの表
彰式が10月26日、米沢市の
ホテルモントビュー米沢で
開かれた。最優秀賞の小国
高2年染谷柚乃さん（16）を
はじめ入賞者11人に表彰状

が贈られた。

人口減少の中、地域と自
分の未来を考えるきっかけ
にしてみらおうと、置賜地
区の高校2年生を対象に作
品を募っている。今回は、
4校から97点の応募があつ
た。染谷さんは、留学生と
して小国町で生活する中
で、交流の重要性に気付い
たとし、自らもイベントを
企画する意欲を披露。「交
流を通して町を好きだなと
思えることが、故郷を残す
一歩になる」などつつつ
た。他の入賞者は次の通り。
▽優秀賞Ⅱ井手吾南（小国）
佐々木莉珠（同）高橋都（米沢
中央）星知里（同）
▽入選Ⅱ鈴木玲佳（米沢中央）
八巻涼雅（同）吉田悠香（同）
竹屋水葵（長井）奥田美佳（米
沢中央）小島未裕（同）
（大坪千絵）

令和6年11月6日
山形新聞
写真提供/山形新聞社

国境を越えた絆育む



折り紙で交流する小国高生とインドの学生
＝10月30日、小国町・小国高（同校提供）

小国町の小国高（山科勝校長、70）は今年、インドの学生訪問団を受
け入れ、1週間にわたる交流を通じて国境を越えた絆を育んだ。同校は生
徒のコミュニケーション力向上に加え、世界の多様性に触れる貴重な機会
になったとして、今後も各国・地域の学生の潜在学習と交流を受け入れら
れるよう、国際的視野を意識した授業を進めていく考えだ。
訪れたのは同国西部・ゲジャ生の寮、町民宅に宿泊した。
ラート州にある大学入学前まで
の12年制学校「アナンド・ビデ
イ・ビハール（AVV）」で
1制で、授業を含む滞在生活
全般をサポートした。日々のや
りとりは英語。バディを務め
た生徒たちは単語を調べなが
ら、身振り手振りを交えて意思
疎通を図った。2日目以降は言
葉の壁が気にならなくなったと

小国高 インドの学生訪問団と交流

国際的視野 今後も意識

いい、インドの暮らしを聞いた
りした。放課後は折り紙を手ほ
どきする場面もあった。一緒に
芋煮会も楽しみ、米沢市の上杉
神社や南陽市の熊野大社を巡る
などして、親睦を深めた。
1年高橋明杜さん（15）は「イン
ドも日本も同世代の感性は似
ている。英語の出来よりも、相
手に伝えようとする姿勢が大事
だと分かった」と自信を深めた。
3年塚原朱季さん（17）は別れ際
に涙する学生たちの姿に「とても
感情豊かで、私たちとの出会
いを大切にしてくれていること
がうれしかった」。インドの友
人とは今も交流サイトで連絡を
取り合っているという。
交流の端緒は舟山知美教頭が
昨年、アジアの学生が集まる会
議でAVVの校長と出席したこ
と。AVV側の申し出で小国訪
問が実現した。舟山教頭は日
本を訪れたいという海外のニ
ズは、私たちが考えている以上
に高い」と話す。留学のように
海外に出向くだけでなく、諸外
国の学生を受け入れる素地を整
えることが、活発な国際教育の
実現につながる」と強調した。
小国高では、そのポイントで
国際的視野だと捉えている。受
け入れを経験した教員が異動し
た場合でも次に対応できるよ
う、英語だけでなく他教科を含
め、国際的視野を意識した授業
に取り組んでいく方針だ。
（上妻大晃）

令和6年12月14日
山形新聞
写真提供/山形新聞社

令和6年12月18日
山形新聞
写真提供/山形新聞社

情報を読み解く大切さについて理解を深めた
読み方講座
＝小国町・小国高



情報読み解く力 大切 小国高で読み方講座

考えるチカラは知ることから
1学級1新聞
地方創生などをテーマに山形新聞社が提唱する「1学級1新聞」を導入している小国高（小国町、山科勝校長）で17日、新聞の読み方講座が開かれた。学生とともに参加し、合わせて約70人が新聞を活用して情報を読み解く大切さについて理解を深めた。
山形新聞の須藤仁長井支

社長が講師を務め、同日付の本紙などを用いて紙面構成や記事の書き方などを紹介した。正確なニュースを見極めるメディアリテラシー（情報を読み解く力）の重要性を説き、「さまざま情報を読み比べることが大切。新聞に目を通す習慣を付けて視野を広げてほしい」と呼びかけた。
3年飯田晴基さん（18）は「新聞の役割を知ることができた。日々目を通して社会の動きを深く理解し、日

SDGs
4 質の高い教育をみんなに

▼ SDGs 「Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）」の略称。国連加盟国が採択した目標で、「質の高い教育をみんなに」など17項目を掲げている。教育格差の是正などを目指す「1学級1新聞」の趣旨と合致する。

常生活を豊かにしていき「い」と話した。生徒は過去

の掲載記事を基に見出し作りに取り組んだ。
県内高校を対象にした1学級1新聞事業は山形新聞社OBの故鈴木正氏の篤志で設立された「鈴木基金」を活用し、趣旨に賛同する企業の協力を得て2017年に始まった。同校は日本新聞協会のNIE（教育に新聞を）実践指定校に選ばれている。
（須藤仁）

令和6年12月24日
山形新聞
写真提供/山形新聞社

小国
小国町の小国小（後藤和枝校長）で20日、小国高生による琴の授業が行われた。高小（後藤和枝校長）が琴の弾き方を教えることなどを通して、5年生の

琴の授業 小国高生が先生

児童に演奏方法など教え交流

児童に琴の弾き方を教える小国高生
＝小国町・小国小

児童約40人と触れ合った。同高で音楽を履修した1〜3年生9人が指導役を務めた。班ごとに分かれて音楽の授業に参加し、爪のはめ方や楽譜の読み方などを教えた。「やぐらやぐら」の演奏に挑戦する児童に「強く弦をはじいて」「リラックスしていいよ」などとアドバイスしていた。
同高2年伊藤亜美斗さん（17）は「演奏方法を分かりやすく伝えるのが難しかったが、みんなの吸収力が高くて驚いた」と話した。初めて琴を演奏した前田佑也さん（11）は「最後に弾けるようになって楽しかった」と話した。
（根本光輝）

